
淫乱じゃない淑女な淫魔の日々

酒呑シゲ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

淫乱じゃない淑女な淫魔の日々

【Nコード】

N5619Y

【作者名】

酒吞シゲ

【あらすじ】

淫魔とは、すなわち人の精を糧とする淫の悪魔。しかし、何事にも例外はある。

淫乱ではない淑女な淫魔エリザベス。彼女の苦悩は、先駆者に似た物である。

笑いあり、涙あり、コメディありあり淑女あり。

一章『新生活編』終了。

二章『騎士団編』開始します。

Opening

こんばんは。毎度お馴染み『淫魔』です。今日は皆さんに少し話したいことがあります、この場をお借りさせていただきます。

我々『淫魔』という種族は、人間の精を絞りつくし、それを糧とする悪魔と世間では評されていますね。現代においても、その風評は変わりありません。そのことです。そのことについて私は話したいのです。

私は『淫魔』としてこの世に生を受け、78年の若輩者であります。しかし、私はいまだに人間の男性に対して、その……何と言えばよいのでしょうか。夜に男性のいる部屋に忍び込む。つまり夜這いして襲う……性的な意味で取って頂いて構いません。

とにかく、私はそういった行為をしたことはありません。

というか『淫魔』という種族だけでなく、魔界を歩いている私に色目を使ったり、蔑むような視線で見られるのは、正直心が痛みます。私も女です。容姿に関しては『淫魔』という種族の特性から……自分で言うのはお恥ずかしいのですが、客観的に見れば見目麗しいものだと思います。そのせいか前述したようなお方が、多くお節介をお掛けになられます。時代は変わります。淫魔も変わります。淫魔たちが全て私のような考えを持っているわけではありません。私とは真逆の性格で快樂主義者である方もいますし、むしろそちらが多数です。

ですが、私は違います。種族の特性のせいで、時には発情したりもします。ですが、そんな時も私は己を見失いません。

その結果、私はいまだに純潔を死守しています。殿方とお付き合いしたことも一切ありません。ですが私は、自分自身に誇りを持つ

ています、胸を張れます。

だからマジで私の事を淫乱な悪魔だとか、はしたない女だとか、それに準ずる見方をしたいでください、マジで。マジを二回使いましたよ。これがどういう意味かわかりますか？

そう、とても重要なんです。

申し訳ありません。少々熱くなってしまいました。だって女の子だもん。失礼、涙は出ていませんでした。

とにかく私は、淫魔の不当な扱いに反対します。時代は変わったんです。

あ、自己紹介が遅れましたね。エリザベス・ラトゥプーティンと申します。

Opening(後書き)

ちよつと前に書いたやつです。

単発なので、更新はしないかなーと思います。

もし需要率が高ければ更新するかもですww

就職決定！（前書き）

感想を頂いたので、続きを書かせていただきました。

何分、プロットなども作っていないので至らぬ点多々あるかも知れませんが。

どうか生暖かい目でスルーまたは『ここはこうだろ！シゲのハゲ！』と言ってもらったら踊ります！

就職決定！

エリザベスは今日も魔界の街を歩く。他の淫魔たちのように、周囲の悪魔たちを誘惑するように、腰を基点にした淫猥な歩き方ではない。軸のぶれない、凜とした歩調である。

一風変わった淫魔に悪魔たちは奇異の視線を向ける。男を引き寄せるフェロモンを周囲に放ってもいないし、桜色の柔肌を露出させるような服も着てもない。彼女の視線、歩調、身なり、全てが淫魔とはかけ離れていた。

彼女が淫魔であることが分かるのは、剣先のように尖った耳、背中から生えた黒翼。No Life Kingの血族を示す紅色の瞳、そしてその内に煌々と輝く高貴さ。整った容姿。姿形は淫魔そのものであったが、その行動や格好は『淫魔』とは大きくかけ離れたものだった。

ギャップ……それに限るだろう、彼女が他の淫魔よりも男悪魔に言い寄られる理由は。彼女にとってそれは迷惑極まりないものである。

『どうせ淫魔なんだし、そんな身なりしてても誘ってるだけなんだろう？』

こんな事を言われた日には、ぶん殴ってやりたいと思うのも仕方が無いだろう。

だがしかし。淫魔エリザベスにとっては、それらが日常茶飯事なのだが。

鮮血のように紅い瞳。腰まで届く桃色の髪。身長は他の淫魔に比べると低めの150cmと少し。

これが客観的に見た私の容姿です。

種族の特性故に、どう鼻屑目に見ても万人が振り向く美貌なんでしょう。顔も他の淫魔と違って、幼い印象を受けるかも知れませんが、ようは童顔というやつでしょう。人間の歳で言うなら16、17歳くらいです、身長のせいで、まだ低く見えるかもしれませんが。対して他の淫魔は20歳半ばと、妖艶ななまめかしさを感じる見た目です。

淫魔に生まれたことを後悔しているわけでも、卑下するわけでもありません。ですが、しっかりと『淑女』らしさをモットーとする私としては、辛いと思うこともあります。

前置きが長くなりました。どうも、淫魔のエリザベスでございます。愚痴ばかりしていて、ストレスでしわが出来ないかが不安になる今日この頃です。

今、私は街を歩いています。目的はある建物に行くことです。

『職業安定所』みたいなもので、魔界の住人達のそれぞれの種族あった職業を紹介してくれたりする場所です。先日まで、私はバイトでレストランのウェイトレスをやっていました。だけど、接客中にあまりにもセクハラ紛いな事をされるので、今朝方店長に辞表をお渡ししてきたのです。

働かざる者食うべからず。

ということ、仕事を探しに行くのです。そもそも一人暮らしなので、お金が無いと路頭に迷うことになってしまふのです。

余談ですが、『淫魔』には親家族と言った概念がありません。初

代魔王の眷属である我々『淫魔』は、自然に生まれるのです。そう、それはもうポンツと。生まれた時には、既に自我というものがあり、自身を認識しています。

他の悪魔、魔物は生殖行為によって繁殖するものが多いのですが、『淫魔』は悪魔や魔物とは規格外なのです。

生殖目的じゃ無いなら、なぜ『淫魔』が人間の精を求めるのかというと、それは自らの欲望に従ってるだけでしょう。私は違います、そんなことしませんよ？

更に余談ですが、『淫魔』が子を宿せないというわけではありません。

閑話休題。

「こんにちは！」

やたらと豪華な外装内装をした『職業安定所』……別名『悪魔協会』に入った私の第一声でした。挨拶は大切です。第一印象が相手とのこれからの関係を左右するともいいますから。

私は挨拶を済ますと、受付のお姉さんの元へ慣れた足取りで向かいます。

「またセクハラですか？」

「はい……」

「まあ、気を落とさずに……良い仕事見付かるといいわね、手伝いますよ」

初対面ではありませんでした。この人は受付のお姉さんこと吸血鬼の『ツェペルさん』。肩くらいまでのセミロングヘアで、瞳の色は私と同じ紅色です。まあ、私よりも少し薄いですが。

理由は、ツェペルさんが吸血鬼だからです。吸血鬼も初代魔王の眷属で、私と気が合うのもそれが理由かも知れません。本来高貴で、魔界でも貴族が殆どの吸血鬼が何故こんな場所で働いているのかというと、勘当されたらしいです。

親に政略結婚の種にされるのが嫌だったそうです。半ば家出の形だったと聞くので、実際は勘当されていないのかもしれませんが。

「ありがとうございますー、ツェペルさんー」

「気にしないで……少し気持ちもわかるわ」

そう言って、優しく微笑みながら私の頭を撫でてくれるツェペルさん。敬愛させていただきます姉様。

「今回は、エリーに良さそうな仕事もあるわよ？」

「本当ですか?!」

エリーというのは私の愛称みたいなものです。

「ええ、そろそろ来る頃と思ってキープしてるわ」

「うう……ありがとうございますツェペル姉様……」

「誰が姉様だ。はい、これ」

ツェペルさんの優しさにむせび泣く私に、一枚の紙を見せてくれる。なにになに……？

「『人間界視察』？」

「ええ、簡単に言えば……人間界に言つて、各国の戦力を含む情勢、政権、財政、経済など、諸々の記録をまとめる仕事よ。本来はエリート悪魔じゃないと出来ないんだけど、私が推薦状を書けばイケるだろうと思うわ、どうする？」

「各国つて、結構忙しいのでは……？ 私なんかに務まるでしょうか……？」

つい不安になってしまいます。というか推薦状つて、やっぱりツエperlさんつてすごい貴族なのでしょうか。

「あー、ごめんね。各国つてのは語弊ね。一人につき一国。それに記録って言つても、国の内部に忍び込んで捕まったら、それこそ元も子もない。だから、自分の感じるように書けば大丈夫。それにエリーつてすぐ仕事変わるけど、有能だしね？」

説明を付け加えるツエperlさん。

「なるほど……」

そう言われると少々悩みます。ツエperlさんがこのお仕事を紹介してくれたのは、きっと人間界なら私を淫魔と知る者が居ないから容姿から注目されることはあつても、今のようにセクハラ、時たまある実力を以つてしたセクハラからも解放される……。

となると、後の問題は……。

「現地でのお金なんかはどうなるんでしょうか？」

「支給されるわ。でも最低限で家賃に食費、後は少しの行動費くらいね」

「お給料などの支払いは、魔界の貨幣でしょうか？」

「それは指定ね。人間界……国ごとの貨幣での支払いも出来るし、

私たちの国のでもオツケー。あ、言っとくけど、給料はかなり良いわよ？ 一応国の仕事だからね」

「……やります！ やらせてください！」

「そう言うと思った。じゃあ、登録用の書類持って来るから待ってね？」

私にそう告げると、カウンターの奥へと下がっていった。良い仕事をを見つけました。人間界にも、前々から興味はありましたし、良い機会ですね。

同じ淫魔の人達からは嫌われてるし、友達とかはツエperlさん以外には居ない……何も思に残すことはないです！ あれどうしてでしょう、涙腺からソルトウォーターが……

「何泣いてるのあなた？」

「いえ、何でもありませんよ……！ ただ、自分の友人関係とコミュニケーション能力に一抹の不安を抱えていただけです……ふふっ」

「……まあいい。はい、これの必須項目に記入お願い。期間は6ヶ月からで、以降は希望で延長できるわ。面接はあるはずだけど、わたしの推薦状あるし無しだと思う」

サラツと言って除けるけど、やっぱりすごい人です。名前、生年月日、現住所、種族、家柄。必須項目を一通り書き終えると、紙をツエperlさんに渡す。

「はい、確かに確認しました。人間界への出発は三日後になりますので、当日の朝9時に『第一層のポータル』にて集合です。場所は解りますか？」

やはり最後はいつも営業用の口調に戻ります。本人曰く、しっかりするところはするらしいです。

「はい、大丈夫です」

「ん、じゃあ今度こそ頑張つてね！」

「はい……本当に今までありがとうございました……」

今までご迷惑ばかりかけて、感謝しても感謝仕切れません。

「な、なに辛気臭い顔してるの！ 別に今生の別れてわけでも無いでしょ！ ほら、私の魔電話番号……何か困ったら連絡しなさい」

赤くした顔を隠すようにそっぽを向いて、私に魔電話番号（自分の魔力を利用した通信技術）が書かれた紙を渡してくれるツエperlさん。

「うう……ツエperl姉さああん……！」

「うわ、なにマジ泣きしてるのっ！」

「だってえ。い、今まで人と交換したことなんか無かったんですもん……わああん……！」

泣きそうになっていたのに、思わず声を出して泣き出してしまいました。

「ああもう！ 分かったから……！」

「す、すいません……じゃあ、また寂しくなったら電話します……」

「寂しくなったらって……」

や、やっぱり駄目ですよ……用事も無いのに電話したら迷惑なだけですよね。それに、私なんかから電話が来たら……きつと……

「あー……勤務中以外の夜なら電話しなさいよ。ち、ちよっとくら

いなら付き合つてあげるわよ……」

また顔を赤らめて言うツェペルさん。やっぱり優しい方です……こんな私にも優しく接してくれるなんて。

「ありがとうございます……！　ありがとう——」

「べ、別にエリーのためじゃないってば！　暇潰しついでよ、じゃなかったらエリーなんかと——」

そう、ですよ……やっぱり私なんて——

「くううつ……って言うのは冗談でー！　ほ、本当はエリーと話したいなー！」

「ほ、本当ですか！」

「ほ、本当本当っ！　……何なのこの可愛い生物は……虐めたいのに虐めたら罪悪感が……これが、これが妹を持つ姉の気持ち……！」

「え、え、何ですか？！」

なにかボソツと言ったツェペルさん。何て言ったのか聞き取れなかったですが、何だったのでしょうか。

「な、何でもないわよ。ほら、準備とかあるでしょ？　もう帰って準備しなさい！」

「は、はい！　それでは、本当にありがとうございましたっ！」

腰を折って丁寧にお礼をして、出口へと向かう。最後に振り返ると、ツェペルさんが手を降ってくれていました。ので、それに笑って返すと、何故か顔を赤らめてそっぽを向いてしまいました。

「……………？」

ともかく、お仕事が決まったことですし、今日は家に帰って準備をしないといけませんね。
うー、頑張るぞ！

就職決定！（後書き）

評価、感想はシゲの原動力となっています。

別連載の『今宵も一献 八百万屋朱顛』も、よろしければ是非是非
ご覧ください！

天罰？

どうも、淫魔のエリザベスです。今日は人間界へ行く日で、昨日の夜から楽しみで仕方ありません。もうストレスでしわの発生を心配していた自分なんてどこにも居ません。

朝9時に『第一ポータル』前に集合とのことなので、今は歩いて向かっている所です。

『ポータル』というのは魔界における転送手段の一つです。魔界にある第一から第八十八までの『ポータル』は相互移動が可能で、人間界にも『中継ポータル』と呼ばれる、『ポータル』の子機のようなものが存在します。今回のお仕事では、『第一ポータル』から人間界の子機ポータルへと飛び、視察対象の国に予め用意されている家に向かうのが、最初の目的となります。

「こんにちは！」

「ん、ああ……君がツエペルが紹介してくれた子かい？」

「は、はい……よろしく願います！」

ポータルの前で黙々と準備をしていたのは、一見すると人と変わらない姿の渋いおじさんでした。一般的に完全な人型に変化できる悪魔は、高位の存在か、強い魔力を持っている実力者の方です。おそらく、彼もそれに当てはまるのでしょう。あごに蓄えた銀色のお髭と、鋭い目がこれまた恰好いいです。高い背丈なので、思わず気圧されてしまいました。

「まあ、時間もなししパツパと行くか。事前に資料は読んできているな？」

「はい、大方把握しました！」

五回読み直しました。

「よし、じゃあ転送するぞ……ちょっと待った、お前は人型にはなれないのか？」

「あ、申し訳ありません……」

つい緊張して忘れていました。背中の羽をしまい、尖った耳を人間のようにならせた。

「うむ、出来ないなら不味いことになったぞ。瞳の色は変えられないのか？」

「あ、目の色は出来ないんです……色を薄める程度ならば出来るんですが……」

「ま、無理ならいいさ、そこまで気にすることでもない」

瞳の色に関しては、魔王の眷族であることの強い現れなのです。

薄めることは出来ても、別の色にすることは出来ません。

おじさんは素っ気なく会話を打ち切ると、背後のポータル（形状は球体で、直径1mほど）をいじり始める。

「人間界は初めてなんだったな……」

「あ、はい！」

「……向こうでは、悪魔と思われる様な言動は慎むようにしろ。それにお前は淫魔だろう？ 悪ければ金持ち貴族の慰み物にされる可能性もある。淫魔との『行為』は、まさに天にも昇るような快感と聞くしな……どうした、顔を青くしたり赤くしたり？」

「い、いえ……緊張しているだけです。ご忠告ありがとうございます」

『ん、まあ頑張れ』と言うと、またポータルを操作する作業に戻った。どうやら素っ気ないのではなく、これがおじさんの素のようです。

「ご忠告は痛み入るのですが、楽しみよりも緊張の度合いが大きくなってしまいました。慰み物というのはつまり、人間の性の捌け口にされということですよ……そんな歪んだ形で、今まで守り抜いた純潔を散らすなんて、死んでも嫌です。これまで通り、淫魔とは思われないよう毅然とした態度で挑むことにしましょう。」

「よし。準備が出来た、この魔法陣の中心部に立て」

私はおじさんの言われるがままに、地面で青く薄光する魔法陣の中心に立ちました。

「もう一度確認だ。転送される先は森の中だ。」

お前が視察する国の場所は、予め渡した資料の中に書かれていたはずだ。国の内部には、この通行証を渡せば入国出来る」

そう言って、私の顔写真が印刷された通行証を差し出すおじさん。年齢は16歳になっていました。

「それでは、健闘を祈る……！」

どうも、淫魔のエリザベスです。

今、私は転送魔法によって、移送空間の中で優雅な旅行気分です。漂っています。移送空間と言っても移動している感覚は無く、暖かい粘膜に包まれている感覚だけがあります。周囲は真っ白い空間で、遠近の認識は難しいです、というかわかりません。到着が近ければ分かることなので、気長に待つことにします。

「およ……？」

どうやら、待つ時間もそう長くなさそうです。辺りの白色に灰色が混ざりはじめています。これが到着の合図ということなのでしょう。空間にノイズのようなものが走ったりして、少し気味が悪いですが……

ピシピシと空間にヒビが入り始め、ヒビから光が差し込み始め……パリンと、小さな破裂音が響く。

「え……」

暖かい粘膜の庇護が、突如として消えた。今は凍てつくような風が私の肌を刺している。

冷氣と強烈な浮遊感に、思わず閉じていた目を開く。

「な、な…… どうして空に?!」

腐っても行為の悪魔、いや腐ってませんただの比喩です。咄嗟に重力操作の魔法を自身に掛ける、浮遊魔法にしようとも思いましたが、浮遊している私が人間に見られる危険性を考えると、恐くてできませんでした。

そして、その選択は間違いになるのですが。

「きゃあ……！」

重力魔法で落下速度が低下していた体が、背の高い木に突っ込んでしまふ。完全に失態です、咄嗟の判断で注意が散漫になっていました。

無論。太い木の枝や、剣のように細い枝に体を打たれ刺される。

「う……が……」

体中に打ち身や裂傷が走る。人の姿で、身にまとう魔力も人間並みにしていたせいで、傷が次々出来る。

痛みのせいで、既に魔法は中断されている。

そして突如、一層強い衝撃が、私の細身に響き渡る。

「つつ……から、だ……が……」

動かない。鈍痛と鋭い痛みが交互に、そして小刻みに到来する。

少しきつい、かなりきついです。

治癒の魔法を唱えようにも、痛みで集中も出来ませんし、それ以前に体が動きません。

段々と意識が朦朧とし、仰向けになった私を焼こうとする太陽が目に入る。

「眩し、いですよ……太陽さん……」

やっぱり、私たちのような闇の隠れ人は太陽に嫌われているのでしょうか……そもそも、どうしてこんなことに……？

『ポータル』の指定ミス？ いや、子機の元に転送されたのだから、それは無いはずですよ。きっと、何かのバグでしょう、先程の移送空間でもノイズが走ったりと、色々可笑しい点も見られましたし。

きつと、バチが当たったんでしょう。こんな良い仕事に尻尾を振って食らいついたから。そんなふしだらで非淑女な行為をしたことのバチがあたったんですね。

「はは……痛い、な……」

そろそろ、本格的に意識の灯が掻き消えそうです。

私を照らしていた太陽も消えて、木陰に移動したような感覚すらします。

あれ……どうしてでしょう、仰向けだったはずなのに、何かにもたれているような感じがします。

「大丈夫か……？　おい……意識はあるか……？！」

イケないイケない……とうとう幻聴と幻覚まで……目の前に霞んだ人間の姿が見えます……

寝ましょう、疲れました。

きつと、このまま眠ったら……いつも通りに……

天罰？（後書き）

短いですが、更新です。

面白いなー。と思ったら、^レ感想やお気に入り登録してもらえると、
励みになります！

最初の出会い（前書き）

連日更新頑張りますよう。

最初の出会い

「——う、うん……」

体の節々が痛い。四肢に力を入れても、全く動こうともしない。まるで自分の体じゃ無いみたいです。

「ここは……何処でしょう？」

今現在、私は仰向けになっている。ただし視界に入るのは、気を失う前に見た太陽さんではなく木目の天井です。どうやらここは家内ようです。そして私はベッドに仰向けでいます。そして――

「ふ、服を着ていない……?!」

いえ、正確には上にシャツを着ています。はい、『上』には。下半身には履いていたスカートはおろか、下着すら穿いていない。ここから導かれる答えは……

「け、汚された……78年間守ってきた私の誇りが……」

駄目です、冷静になりましょう。それらしき『痛み』は感じません！ きっと大丈夫です、信じるのです。自分を。でも、ならここは何処なのでしょう？

「あ、私の服と鞆が……」

体の中で唯一動く首を動かした私の目に入ったのは、机の上で綺麗に畳まれている、私の服と鞆でした。だけど鞆は無事ですが、服

は所々ほつれて穴だらけ、見る影もありません。

「そうでした……転送に失敗して、樹に突っ込んでしまったんですね、ああなってしまうのも当たり前ですね。でも、あれだけボロボロだと、もう着れないでしょうね……」

気に入っていた服でしたのに、残念です。いえ、今重要なのはそこではありませんね、ここが何処なのか、ということです。

私が思考を巡らしていると『ガチャ』と、扉が開いた音が部屋に響いた。

「目が覚めた？」

「え……？」

首の稼動域の限界に挑み、音の方へ視線を向けると、男性が立っていた。見た目180？はありそうな男性です。

「あ、あなたは……？」

「そんなに警戒しないでくれ。何もしてない、服の着替えも女性にやらせた」

私の未知の者に恐怖する視線に気付いたのか、男性は手を上に上げて、私の氣を楽にさせる言葉を放つ。男性への警戒は怠らずに、状況を見る。

男性の口ぶりから、ここは彼の家。部屋の広さや、高価そうな装飾品から見るに、財力のある人間なのかもしれない。男性の見た目は、癖つ毛のある耳くらいまでのショートヘア。髪と同じ、金色の瞳。そして中々に整った顔。甘い言葉でも囁けば、女なんぞイチコロって顔しやがってます。

言っときますが、私はそんなことでなびきませんよ！

「俺はレイライト。レイライト」リライブル。大層な名前だろう？
レイと呼んでくれればいい」

「……エリザベスと言います」

気安く自己紹介を始めるレイという青年。顔には親しげな笑みを浮かべていますが、油断は禁物です。しかし名乗られたからには、こちらにも返さねばなりません。礼儀は大切です。

「そうか、よろしくエリザベス。いきなりでなんだが、お前『悪魔』だろ」

「……………う、え？」

「隠すな。その鮮血の深紅の瞳……人型に変化しているようだが……な？」

穏和な笑みを浮かべていたレイ青年の表情が、途端に猛禽類を思わせる獰猛な笑みに変わる。ポータルのおじさんの言っていた意味が分かりました。人間にとって悪魔とは、魔王に属する軍勢の一員。つまり人間界では私は敵なんだ。

「ど、うして……？」

「確かに、一般人では分からないだろう。ただ、俺はその手の気配には聡いんでな……？」

答える悪魔よ、何が目的で人間の住む地へ降り立った？」

「それは、言えません……」

同じ種族には嫌われ迫害され、魔物や悪魔には『淫魔』というだけで言い寄られ……それでも、自分の故郷や友達ツェヘルさんが傷付くのに協力するなんて出来ません。

「言えませんが……！ 幸い私は動けません……姿も人型ですから、殺すのは赤子の手を捻るよりも簡単でしょう。どちらにしろ、口を割るつもりはありません！」

仰向けのまま、レイに出来る限りの強がりを見線に込めて言い放った。

「……ふむ、意外だな」

しかしレイは、それに気圧された風もなく、意外そうに私を眺めた。

「お前は淫魔だろう？ てっきり、俺を誘惑でもして逃げる算段を立てていると思ったがな？」

「そ、そんな節操の無いことをするわけがないでしょう！ 私がそんなにふしだらな女に見えますか？！」

「え……ああ、すま……ん？」

失礼なことこの上ないです。思わず叫んでしまいました。

「淫魔というだけで、そんな目で見られるのが嫌でこちらに来たのに、結局変わらないのですね……」

「お前、エリザベスと言ったか……淫魔ではないのか？」

「体の一片、心の一欠けらまで、余すことなく淫魔です。ただし、そこいらにいる尻の軽い淫魔とは一緒にしないでもらいたいです！」

ああ、思えばこの78年間、苦心し続ける人生でした。ツェペルさん、一度も連絡出来なかったですが、生まれ変わったらまた仲良くしてくださいね……

「いや、失礼した」

「……何がですか？」

不意に、レイが頭を下げる。

「人を見掛けで判断するな。という言葉が我等人間にはあるが、聞きかじった知識のみで悪魔を知った気でいた私の愚直さに呆れた。

エリザベスとやら、お前を淫魔というだけで誇りを傷付けるような発言をしたこと。この非礼を詫びよう、すまなかった。

そして試すような結果になってしまったが、俺はお前が何を目的に人間界に来たのかは知っている。すまないが鞆の中にあつた書類を読ませてもらった」

「な……どうして人間に悪魔の文字が読めたのです！」

「なに、職業柄で悪魔についてはよく調べるのだな」

軽く言つて除けるレイ。人間というのは、誰かも彼もこのようなのばかりなんでしょうが。

謝られたことに関しては、少し嬉しかったのは内緒です。

「ようはお前の目的は、人間観察というやつだろう。ここ数百年は魔の王も人間の地に踏み入って、自ら戦を仕掛けることも無い。実際のところは知らぬがな……もしも、お前が自らの誇りを賭けて『人間の地を蹂躪する』ことが目的ではないというなら、見逃しても良い」

「……………」

正直なところ、このレイという青年の考えが分かりません。てつきり、人間は悪魔を毛嫌いして、見れば切り掛かるぐらいのものだと思っていました。

しかし、レイに提示されたこの条件……『人間界視察』という仕

事の書類を見る限りでは、戦争行動を感じさせる内容は無かつたはずです。

「さあ、答える」

「……分らないのです。書類には戦争する目的のことなんて書いてないけど、本当は分らないんです……！　だって、だって私はただのバイトみたいなものでやっただけなんですもん！　

それなのにあなたは、『誇りを賭けて』なんて……どう答えれば良いか分からないです……」

「それが事実かも分からん。答えることが出来ぬのなら……」

そう言つて、腰に帯刀した刀剣を僅かに抜く。

「……殺すんですか？」

「やむを得ん……」

「……男の人なんていつもそうです。自分の都合が悪くなったら、私をけなすんです、売女と……」

でも……淫魔に生まれただけで、こんなにも辛いのなら、あるいは死ぬのも良いかもしれないです……ふふ……」

今までを振り返り、これから自らに起こりうる事態を思うと、思わず涙が出た。手を動かすことも出来ないから、とめどなく流れる涙は頬を伝つて、枕に染みを作る。人間に恥ずかしい姿を見られた羞恥なんてどうでもいい。このまま死んで、辛いことを忘れられるなら、それも良いかもしれないです。

「普通の女の子に生まれたかったな……」

それを聞くのは、この場にはレイしきない。なぜそんなことを言ったのかは分からない、思わず口から出たのですから。ただ、呟くと涙が更に流れ、余計に辛くなった。

「人間にこんなことを頼むのは悔しいですが、その剣で一思いに、楽にして頂けませんか……？」

「……………」

目を閉じる。最後に見たのが自分を殺そうとする人間の姿とは、我ながら録な人生を歩みませんでした、歩めませんでした。

「……止めた、これでは俺は悪者だ」

目と、生への希望を閉じた私の耳に、そんな言葉が飛び込んで来る。

「種族は違えど、麗おなししい女子の涙は、どんな大魔術よりも強い魔力を放つものだ。

それに悲しそうに涙流す女の子を斬り殺すことが出来るほど腐っていない」

「な、泣いてなんか……」

涙を拭おうとしたんですが、如何せん体が言うことを聞いてくれません。

「先程まで散々酷い言葉を吐きたくっていた俺が言えることではないが……その涙に偽りなどないと信じる。

数々の非礼、再び詫びよう……」

レイはそう言っただけで膝をつくと、剣を柄ごとに自分の前に横たえて、深く頭を下げた。

「申し訳なかった……貴方は我が騎士の誇りを賭け、責任を以って家へと送り届けよう」

「……そんなこと言っただけ、口を滑らせるつもりでは……？ 私は何も——」

「——そんな企みはないさ。

ただ健気な女の子の弱い一面を見て、お前に惹かれた。信じたくなっただけ……どうだ、お前も俺を信じてくれるか？」

一転して、紳士的な口調になったレイ。『騎士の誇り』と言っていたので、この国の騎士様なのでしょいか。

人間に同情されたということでしょうか、一瞬ではあるけれど、自らの人生を無駄に思ってしまった……今までの自分とそれに連なる人達の行為を泡沫に帰す選択を取ろうとしてしまった……

そんなことでは駄目、私自身に申し訳がたたない。ここは何としても生き永らえるのです。

「し、信じますっ！ だから殺さないでください……！」

「これって、誰かが俺見てたら俺って『美少女を襲う変態』……？ 改めて言うが、殺さない。さっきも言っただろう？ 『お前に惹かれて、信じてみたくなっただけ』ってさ」

不機嫌さを感じる風で言い捨てるレイ。私、何か言いましたでしょうか。あれ……それよりも、

「ひ、惹かれたというのは何ですか……？」

「……言葉通りの意味だ」

「れ、恋愛的な意味ですかっ?!」

「ダイレクト過ぎるって! もう少し包み隠してやんわりとした表現にしろっ!」

それ以前に、お前が考えてるような意味で言っただけではない。

それに俺とお前は人間と悪魔、相容れんだろう」

「そ、そうですね……当たり前ですね、失礼しました」

今までこんな言い方で好意を伝えられたことが無かったので、柄にもなく純情少女のように初心になってしまいました。少しだけ嬉しかったです、否定などしませんよ。

「では……送るのは資料に書いてあった家でいいか?」

レイが確認するように聞く。

「いえ、自分で行けるので……大丈夫で、す?」

「ああ、そうだな。お前の体が動くのならばな……?」

「……そうでした」

「まだ眠っているか? 言っておくが、もうそろそろ日をまたぐ時間だぞ?」

「ええ?! そんなに気を失ってたんですか! 急がないと……!」

「まあ、そんなに焦るな。なんなら泊まっていてもいいぞ?」

ニヤリと口角を吊り上げて、悪人面を浮かべるレイ。さっきまでの騎士道精神溢れる紳士然とした彼は何処に行ってしまったのしょう。

それに、いつまでもやられてばかりの私ではありません、たまには仕返しの一つでもしてやらねば、悪魔の面目が立ちません。

「な、なななな、何を言ってるんですかつ！ 早く、早く家に帰してください！」

やはり無理でした。

ちなみに私の本当の家は、現在女性限定という名目で貸家になっています。残念ながら帰っても私の居場所はありません。

「ははは……すまんすまん。お前に冗談が通じんことは分かった、では家まで送ろう」

「分かったのなら止めてください……ね？」

こんな殿方は初めてです。今まで言い寄ってきた男性は、誰も彼も非紳士的な方ばかりでしたし、礼儀などありませんでしたのに。目の前にいるこのレイという青年は、紳士的な男性かと思えば、人の事を（悪魔の事を）からかいます。それも下的なニュアンスを含んだからかいです、これでは淫魔の名折れです。

「では、ほれ……」

レイはそう言うと、私に背を向けて腰を低くして屈みこんだ。

「ほれ……とは？」

「ああそうか。体が全く動かんのだったな、仕方ない」

すると彼は、布団を除けると私の手を取る。あれ、そう言えば今の私は服を……。私が何かを言う前に、レイの顔が瞬く間に赤くなっていく。

「お、お前！ 服くらい着ろ、やはり淫魔かつ！」

「あ、あなたが使用人に指示して脱がしたんじゃないですか、この野郎うつうつ！」

もし私の腕が動いたのなら、彼の頬を引っ叩いてやりたかったです。

最初の出会い（後書き）

ご感想やお気に入り登録してもらえると、励みになります！

アルファポリスのランキングにも参加しているので、ポチッとワンクリックしてくれると嬉しいです！

人物紹介：エリザベス

名前：エリザベス Name: Elizabeth

種族：淫魔 Race: Succubus of pure blood

年齢：78歳

淫魔とは、闇夜に紛れて男性から精を絞りつくし、それを自らの糧とする悪魔である。

彼女らにとって身の内に精を溜め込む行為は、成長するための手段である。そして、自身らの欲望を満たすための行為の一つである。彼女らにとっては一石二鳥感覚である。

それ故に、淫魔は異常なレベルの快楽主義者が多い。大多数、というか全ての淫魔は例外なく快楽を好む。

また、淫魔は魔界における初代の『魔王』の眷族の末裔である。その身に伝わる純血は現在まで引き継がれている。それを象徴するのが、貴族である淫魔たちだ。現存する淫魔たちは、位や爵位の違いはあれど、ほぼ全ての淫魔が貴族である。

淫魔は子を宿せますが、その子は淫魔として生は受けません。淫魔とは自然に生まれ、生まれた時には既に自我というものがあり、自身を認識している。

つまり淫魔の貴族は一代貴族のようなものだ。しかし、淫魔は欲

望と快楽を追及することで、自然と力を具えて、そして貴族になるのだ。

しかし、何事にも例外は存在するのである。

エリザベスは淫魔でありながら『純血』つまり『処女』だ。彼女は自身の性欲に従うことをよく思わず、本当の意味で好意的に思っていない相手に、己の体に触れさせることを拒んでいる。

しかし、身の内には欲求は蓄積されていく。そのため定期的に動物で言うところの『発情』が起こる。そんな時は家に引き込み、なんとか自身を『慰める』という方法で性欲を押さえている。

いつの日か、彼女が向かわれる日も来るのかもしれない。

身長：155cm 体重：——（文字が塗りつぶされていて読めない）

人物紹介：エリザベス（後書き）

こんなん作ってみました。

不幸（前書き）

予約投稿の有効活用

不幸

どうも、淫魔のエリザベスです。

最近は……空から木に墜落して体が動かないという事態に陥いました。

それに伴い、初めて出会った人間の男性に捕獲……もとい介抱されていました。

その後、人間界での私の家に送ってくれると言った話になったのです。

彼は私に背中を『家までの特急だぜ?』と言わんばかりのドヤ顔を晒しやがった後に『あ、体動かないんだったね』とほざきやがりました。

『仕方ない』と世話をかける子供へ向けるような表情をした後に、あろう事かほぼ全裸（シャツ一枚の下着なし）の私の体を隠す掛布団をはがしました。

「お、お前！ 服くらい着ろ、やはり淫魔かつ！」

更に更にあるうことが、私に責任の擦り付けを行使しました。

「あ、あなたが使用人に指示して脱がしたんじゃないですか、この野郎うつうつ！」

この場合、怒っていいのは私の方ですね。

万人が見て、そう思うでしょう。

ですが、体の動かない私には僅かに指を動かす程度の事しか出来ません。

体が動くようになったら、必ず頬を引っ叩いてやります。

「み、みみ見てないで、早く元に戻してくださいっ！」

私に大して『淫魔めえ！』と罵倒したくせに、いつまでも掛布団を手に持ち放心状態でいたレイに、もう泣きそうになりながら叫びます。

心なしか、彼の視線が私の下半身に向いているような気がするのは、きつと自意識過剰な私の眼の錯覚と信じたいです。

「う、ううむ……すまん。いや、なかなかに艶めかしい御足をお持ちで——うぶっ！」

怒りと羞恥の力は偉大です。

私は残された力——すなわち気合——を使って立ち上がり、未だに放心状態のムツツリじゃないスケベのレイから掛布団を引つたくり、素早く体に巻いた後に、頬を引っ叩いてやりました。

人型であるため、その力は人間並みであつたのが悔やまれます。

無論、先程の分をあわせて二発です。

今、彼の両頬には綺麗な赤い花が咲いています。

「も、もう少し女性に対する配慮を持ってください、この変態っ！」
「——っつ……少し太腿を見ただけではないか、打つことは無いだろう！」

「貴方は騎士なのでしょう、でしたら紳士然としてくださいっ！」

「騎士であろうと俺も男だ、そして自然と目が行くのも男の性だ！」
「開き直らないでくださいっ！」

本当に、先程までの騎士と認めざるを得ない紳士は何処へ行ってしまったのでしょうか。

あれ……？

「わ、私……立っています！ あっ、とと……」

しかし体のそこら中が痛く、まさしく満身創痍と言った具合です。普通に立っただけなのに足がガクガクで、つい倒れそうになりました。

「なんだ、立てるんじゃないか」

「ええ……誰か様のおかげです」

「ふ、礼には及ばん」

「皮肉ですよっ！」

私はそう一言残し、荷物の置かれた机へと亀のようにゆっくり歩み寄ります、これ以上のスピードはキャパシティの限界に達します。

「なんだ大丈夫か。手を貸そうか？」

「いいえ、大丈夫です。結構です」

懇切丁寧に、二重に断りを入れます。これ以上彼の手が私に触れる事態は、何としても避けなくては。

「荷物からは何も取っていないんですか？」

「ああ。資料にしても、お前が倒れていた場所で、鞆から飛び出していたから気付いただけだからな。それもちゃんと元に戻している」

「そう……ですか。
治療に関しては礼を言わせてください、ありがとございました。
それでは、失礼します」

お礼は欠かさず、淑女の常識です。

そして、私は再び亀の如く歩みで部屋の出口を目指します。

「あ、おい！ 送っていくと言っただろ？」

「いいえ、これ以上お手を煩わすのもいけませんので」

それだけ言つて、私は部屋を後にしました。

「大きなお屋敷です。あの人、やはり騎士でもそこそ偉い方なの
でしょうか。まだ若く見たのですが……」

部屋を出ると、大きな廊下でした。

幸い、出口のある大広間はすぐ近くにあつたので、迷わずに済み
ました。

一つ辛いことがあつたのは、二階に居たという事です。
階段を下りるのが本当に大変でした……手すりに体重を掛けなが
ら、ゆつくりと降りることで事無きを得ましたが。

「それにしても、夜なのに活気がある街ですね」

屋敷を出て豪奢な家——もはや屋敷——が立ち並ぶ通りを抜ける
と、更に大きな通りに出ました。

人々の喧騒が、夜の暗さを追い払うような光景です。

通りの両側に立ち並ぶ様々な出店、それを楽しそうに見る客たち。

客層もまた様々で、冒険者ばい風貌の方や、恋人たち、遊び人、
行商人、果ては家族のような方まで。

途中、現在位置が分からないので、友人たちと歩いていた男の子に聞くと、街の中心にある通りだと分かりました。

心なしが男の子の頬が紅潮して、嬉しそうに唇が歪んでいましたのは何故でしょう。

もしや、今の私の服装ののでしょうか？

確かに掛布団を体に巻いただけなので、近くで見れば可笑しく見えるかもしれません。

遠目で見ればマントかもしれませんが、確かにこれは笑いものです。

元々着ていた服は破れていますし、仮に破れていなくても屋敷で着替えるのは、恐くて出来ません。

「おう嬢ちゃん、何探してるんだ？」

私が手持ちの地図と睨めっこをしていると、不意に誰かに声を掛けられました。

「……？」

顔を上げると私の数m先で、柄の悪そうな男性が三人で徒党を組んで、私を見ていました。

見るからに小物臭のする方々です。

「夜中にこんな場所歩いてたら、危ない人らに酷い事されちまうぜー？」

「違いねえ、ひっひっひ！」

三人の中心に立つ、一番がたいの良いリーダーらしき男性が言う

と、他の二人が顔を歪めて、厭らしく気持ちの悪い笑い声を出す。

「あなた方には関係ありません、どうぞお構いなく」

「おいおい、それは無いぜえ嬢ちゃん！　ちよつとくらい構ってく
れてもいいじゃねえかー？」

一々構っていられないと判断し無視に徹し、私が隣をすり抜けよ
うとすると、リーダーらしき男性が私の腕を乱暴に掴む。

「――っ！　離してください！　離さないと……！」

力を入れて振り払おうとするけれど、男の手は岩のように固く、
全く動かない。

ただの人間にどうしてこんな力が……？！

動揺しつつも、なんとか身の内の魔力を……素早く操作出来ない。

「あ……」

とんだ馬鹿なことをしていた。

今の私は、殆ど人間と変わらないんです。

腕力は人間の女性にも劣り非力、魔力も常に比べると遥かに劣る。

「なんだなんだあ？　抵抗するんだったらちよつと乱暴になっちゃ
うよ、お兄ちゃんたち？」

「抵抗しなくても乱暴じゃねーか！」

「ひっひっひい！」

下賤な言葉を吐き出して、再び笑い出す三人組。

なんとかして逃げないと。

「離して！ 人を呼びますよ！」

キツと睨みつけるも、男は厭らしい笑みを浮かべたまま私を見たまま。

「誰か！ 誰か助けてください！」

辺りを見回して声を出す、誰も居ない。

さっきまでの喧騒が嘘のように静まりかえり、私と男たち以外には、誰もいない。

「当たり前だろ、裏通りなんだからよお？ 通りはあの騒ぎだ、大声で叫んだって誰も気づきやしねーよおー」

「そんな……」

しまった……地図に集中して、全く辺りに警戒していなかった。最悪だ、最悪の落ち度だ。最悪の展開だ。

「もういいだろ、身ぐるみ剥いでここでやっちまおうぜ？」

「かー、相変わらず気が早いやつだな、まあ嫌いじゃないけどな」

仲間の一人がそう言う、リーダーらしき男の太い手が、私の服――掛布団――を脱がそうとする。

「止めて！ 止めてくださいっ！」

「おいおい、これマントと思ってたらただの毛布じゃないか？」

抵抗の言葉も行動の甲斐も無く、あっさりと服を取られてしまう私。

「って、なんだその格好！ 最初っからその気でここに来たんじゃねーのか?!」

「違います！ 私を他の淫魔と一緒に――」

「あー、分かった分かった。大人しくしろって」

暴れる私の言葉を適当に受け流し、残り一枚になった私のシャツをも剥ぎ取ろうとする。

鼻息が、呼吸が荒く、目も血走っている。

「止めて、誰か助けてっ!」

助けを呼ぶも、その声に応える者は誰もいない。

どうして、どうしてこんなことに……？

今までの気分を変えて、誰も私の正体を知らない人間界に来たのに、結局こんな形になるの？

どうして。

淫魔であって、淫魔としての生き方を選ばなかった私には、幸せになる権利なんて……無いの……？

「いかに治安の保たれた国であろうと、その陰にはクソ共が蔓延っ

ている。

どんな国だろうと、それは変わらないんだ。
知ってたか——エリザベス？」

「——……え？」

聞き覚えのある声に振り返る。

そこには、黒いズボンに薄い青色のシャツと、ラフな格好をした
レイが居ました。

服装とは対照的に、その手には銀の光を放つ刀剣を持っている。

「おい。んだてめえ、邪魔すんのか?!」

「邪魔とは人聞きの悪い……その女は俺と先約だ」

ゆっくり一歩踏み出し、私の方へ近づいてくるレイさん。

その一歩は余りにも優雅で、空から差し込む月明かりで幻想的に
すら見えた。

「なんだ？ やろつてのか？ おい！」

リーダーらしき男性が仲間へ声を掛けると、二人の仲間は一つ頷
いて、腰にそなえた短剣を取り出してレイに飛び掛かった。

「はあ……これも仕事って考えるか……」

しかしレイは臆することなく歩を止めず、ため息を付いて余裕す
らあるように見えます。

「つち、嘗めやがつ——」

「はあ？」

背後のリーダーらしき男性が、素頓狂な声を漏らす。

それもそのはずで、動きらしき動きを見えないレイを前に、二人の仲間が倒れたのですから。

人型であるせいで動体視力が低下してるとは言え、私にも銀の線が空を裂いたのしか見えませんでした。

「おい、そこのお前。今すぐ消えろ、五秒以内に消えなかったら本当に殺す」

レイがリーダーらしき男に冷たく言い放つと、私の腕が離して仲間の事など放って、素晴らしい逃げ足を披露して去って行った。

定番の言葉すら言わずに逃げるとは、小物の中の小物です。

「エリザベス」

「……あ、はい！」

「お前の住むはずの家は……もの国でも治安の悪い場所に位置する。」

こんな奴らがそこいらにうつついてる様な場所にな」

言ってレイは地面に転がる二人を蹴る。

「だからこそ、体の動かんお前を送ってやろうと思ったのに、これだ……」

「すみません……」

「何が手を煩わせたくないだ、余計に面倒かけやがって」

「すみま、せん……」

「あーもう、すぐ泣くな」

「っつ、泣いてません……！」

緊張の糸が切れ、油断して涙腺から水滴が少しこぼれました。

こんな短時間で、しかも同じ男性に涙を見られるなんて、恥ずかしくてたまりません……

「ありがとうございます……」

「……まあ気にするな。もうすぐそこだろう、今度こそ送っていくからな」

「ありがとうございます……」

地面に座り込んでいたので、立ち上がろうとするが、足に力が入りません。

無理が祟ったのかもしれない。

「すみません……ちょっと、待って……」

再度力を入れようとするが、立てない。

「あれ、可笑しいな……あっ——」

隣で見ていたレイが見兼ねたのか、私の手を持って抱き上げる。俗語で言えば『お姫様抱っこ』の状態です。

事前に掛布団を体にかけるという、紳士スキルを再発動するのも忘れていませんでした。

「見てもらえない。お前本当に淫魔か？ 高位の悪魔か？」

「……すみません……」

からかわれるも、返す言葉もなく謝ることしか出来ませんでした。

「…………急にしおらしくなりやがって……………」

そう言うと、レイはそれっきり黙ってしまいました。

私も顔を布団に埋めて、何も言いません。

レイの腕は細く、しかし先程の男以上に力強いものでした。

そして何より……………恐くありませんでした……………

不幸（後書き）

一人称に不自然さを感じます。

戦闘の描写と、エリーの心理描写は別にした方が良いですかね？

つまり戦闘Ⅱ三人称 エリー心Ⅱ一人称 みたいな感じです。

教えてください！

ご感想やお気に入り登録してもらえると、励みになります！

アルファポリスのランキングにも参加しているので、ポチッとワンクリックしてくれると嬉しいです！

提案（前書き）

1 日 2 話更新だと……書くのが楽しくて仕方がない！

提案

どうも、淫魔のエリザベスです。

不幸続きでめげそうですが、何とか生きています。

最近、人間にも不器用だけど優しい方が居るのを知りました。
やはり偏見や先入観だけで判断するのは良くないですね。

「なかなか良い家だな、鞆はどこに置く？」

「あ、その机の上をお願いします。ありがとうございます……」

家は一階にキッチンを備えたりリビングと客間、二階には自室と空き部屋が2つ。

一人暮らしには豪華すぎるものでした。

そしてレイ『さん』の家からすれば、一般市民の家のほとんどはあばら屋と変わらないでしょう。

「どうした、本当にしおらしくなったな？」

「だって命の恩人です。礼儀を欠いては淑女の名折れですから……」

「命って、大袈裟な……」

「私にとって純潔とは命と同位のようなものです！」

これまで守って来たのに、もし失ってしまえば、他の淫魔との違いが一つ減ってしまいます。

純潔であることは、『淫魔エリザベス』の象徴でもあるのです。

そして、もしレイさんが居なければ、それを守ることが出来ませんでした、故に彼は命の恩人なのです。

「す、すまん……」。

なんというか、お前は淫魔らしくないな。変わっているというか、やはり他の淫魔とは違う」

私の表情に鬼気迫る感があったからでしょうか、少し引かれました。

「ほ、本当ですか？ どちら辺がですか？」

「そうだな……確かに誘惑をしたりと、ふしだらな印象はない。だが、お前が言う通りに『淑女』を意識しているせいか、種族の特性も相まって独特な『妖艶さ』を醸し出しているような……」

「よ、妖艶さ……つまりそれは……え、エロですか？！」

「ぶっ！ だからもう少し包み隠してやんわりと言え！」

私としたことが、妙な言葉を……

しかしレイさんの言う事が確かなら、私の78年間やってきたことは、私の目指すものと反比例する結果を生み出していたということですか。

「ここが寝室みたいだな、よつと……」

寝室と思わしき部屋を見つけ、扉の前で立ち止まったレイさん。扉のノブを捻るために屈んだのですが、依然私を抱きかかえたままであるため、不可抗力で私の顔と急接近。

「わ……」

近くで見ると、レイさんは意外に幼い顔立ちをしていました。女の私から見ても、可愛いと思える顔立ちです。

でも、童顔と言う程でもなく、大人と少年の境目くらいでしょうか。まさに青年と言った風です。

「わわ……」

これまで男性に長時間体に触れられることも、こんなに近くに寄せられたことも無かったので、言葉も出ません。

「あ、すまん……ドアを開けようと思って」

「わ、分かってます……お気になさらず……」

命の恩人です。こんなことで一々怒っていては、私自身の度量が知れるというものです。

羞恥で狼狽^{ろうはい}する私と対照的に、レイさんは精々頬を赤らめる程度です。

もしかしたら女性関係には慣れている方なのでしょうが。

「ん、じゃあ下すぞ？」

「あ、はい。お願いします」

ベッドの前まで来たレイさんが、ゆつくりと私を下ろし、掛布団を掛けてくれる。

やはりこういう場面では、しっかりと紳士的な一面を垣間見せるのですね。

「あの、レイさん……？」

「ん、何だ？」

「レイさんは、女性との関係は豊富な方なんでしょうか？」

布団から首だけを出す私は、気になっていた事を聞いてみることにしました。

「何故そんなことを聞く」

「いえ……私を抱き運ぶのも、顔が近づいたりしても狼狽^{うろた}えたりしなかったので、思い至ったのですが……」

しかしレイさんの答えは、意外なものでした。

「いや、女性関係に関しては無知だ。恋仲になったこともないし、女と話すのは仕事関係の人間くらいかだ。

ましてや個人的に話すとなると、使用人くらいだな」

「そ、そうなんですか？ その割には色々と慣れてらっしゃるようにお見受けしましたが……？」

「うむ、家訓で『女性には紳士的に対応せよ』と、幼少の頃に父に言われてな。先程までの対応も、俺の出来得る精一杯だ」

だとすれば、シャツ一枚しか着ていない女性が寝ている布団を剥いだ時点で、家訓を守っていないですね。とは言いません。

レイさんの言葉から考えるに、今まで女性と接する機会が極端に少なかったので、どう接すればいいか分からなかったのでしょう。人間界の騎士という役職は、女性関係には厳しいと耳にしますし、かくいう私も、男性とは親密になった経験がありませんから、他人の事をどうこう言うことは出来ません。

「……では改めてお礼を言わせてください。危ない所を助けて頂き、本当にありがとうございます。

レイさんのご好意を無碍にして、その結果、更に余計にお手を煩わしてしま——」

「——ああ、もう良い。俺が好きでやったことだ、それにそこまで畏^{かしこ}まらなくていい。本当にお前は悪魔、それに淫魔か？」

「……ありがとうございます。近いうちに、お礼をさせて頂きます」
流石にここまで言われれば、素直にご好意を受けるしかありません。

二度も好意を投げ捨てるのは、淑女としてやってはイケませんか
らね！

でももちろん、お礼を返すのも忘れません、淑女の常識です！

「別に良いんだがな……それよりお前は——」

「——レイさん？」

「な、何だ？」

レイさんの言葉を途中で遮る私。

「失礼ですが、あまり『お前』と言われるのは好きではありません。
どうぞエリザベス……いえ、エリーとお呼びください」

「あー、分かった。では、エリー？」

「はい、何でしょう」

先程から感じていた違和感は、レイさんが私を『お前』と呼んで
いたからだったようです。

普段会話する人は、総じて私をエリーと呼ぶので、やはりこちら
の方が小気味も良いです。

「エリーはこの家に住むつもりなのか？」

「？ はい。というかもう住民登録は済ましていると思います。ど
うしてですか？」

「ああ、さっき襲われたことで分かったと思うが、この辺りはグラ
ベルの中でも治安の悪い地域だからな。

日中は多少はマシだが、日が沈むと『あの通り』だ」

グラベルとは、この国——都市——の名前です。

商業都市グラベルと呼ばれていて、大陸で最も商業や工業が繁栄している国です。

また都市面積の5分の1はなんらかの工業地で、常に熱した鉄などを打ちつける音が鳴り響くことと、常に商人たちの活気の良い声が止まないことから、『眠らない都市』との別称もあります。

しかし5分の1もの面積が工業地なのにも関わらず、残りの部分だけでも他の大国の倍以上の大きさがあります。

勿論、都市人口も他の追隨を許さない多さです。

また多種多様な武器を産出しているため、荒事を生業とする方々も多く滞在しています。なりわい

そんな荒くれたちが問題を起こした時に抑えたり、国の治安維持や警備、有事の際の——他国からの侵略——防衛などの為に『国兵』と呼ばれる軍隊も存在します。

『国兵』と言うのはあくまで総称で、主にレイさんのような騎士などが当て嵌まります。

それとは別に、雇われて国に就く傭兵と呼ばれる冒険者さんたちもいるそうです。

ふう、事前に勉強していて正解です！

「まあ、つまり。可能であるならば、なるべく大通り近くに面した場所に引越すことを勧める。」

通りなら真夜中でも人もいるし、何より警備兵がいるしな。まあ

よっぽどの馬鹿意外はモメ事は起こさない」

「なるほど……」

「まあ……ここでも日中に移動するくらいなら、フードなんかで顔を隠せば問題ないだろう」

「フード……ですか？ それは必須ですか？」

「ああ。女、エリーならば尚更^{なおよさら}必須だろうな」

女性、それに渡しならば必要不可欠……？

数秒の間その意味を考えましたが、答えが出ませんでした。

「えっと、どういう意味でしょう？」

「………お前は自分の器量の良さに自覚はあるか？」

「あつ、また『お前』って言いましたね！」

「つまりい！ お前みたいな見目麗しい美少女が裏通りを闊歩^{かつぽ}していたら、性欲を持て余したサルみたいな連中の恰好の獲物ってことだ、わかったか？！」

レイさんは呆れた顔で溜息を吐くと、人差し指を私のおでこに押し付けて、一息でそう言いました。

「それは……つまり強引に性交を強要されるということですか！」

「だからもう少し包み隠してやんわりと言えええい！」

「つ、唾が飛びました……」

「あ、ごめんなさい」

息を荒げたレイさんでしたが、私が不満を口にするるとハンカチを取り出して顔を拭いてくれました。

息は荒いままで顔を拭いてくれたので、少し怖かったです。

「確かにレイさん言うように、私の容姿は……その、種族上の理由

で綺麗なのかもしれませんが。

ですが、早々に引越しをしようにも、『視察』の本部に連絡をするにも時間がかかります。それに、そんな自分勝手な理由で余計なお金を掛けることも出来ないと思います……。

生活する分のお金は十分に支給されますが、『視察』するための過程で労働するつもりです。

ですから、その際に稼いで賃金で引越しようと思います……」

私自身もこんな危なっかしい場所で、最低でも6ヶ月——契約期間——を暮らしたくはありません。

幸い、賃金は全て引越しに回せますし、1、2ヶ月も働けば何とかかなると思いますし。

「ふむ……エリー、少し提案があるのだが」

「はい、何でしょう？」

レイさんは少し逡巡した後、良い考えを思いついた子供のような表情を浮かべ、私に語りかけてきました。

「俺の屋敷に住まないか？ 幸い、部屋は腐るほどに余っているからな」

「え、ええ？！ そそれはイケませんよ、申し訳ないですしっ！」

「いいって、それに……」

「そ、それに……？」

「エリーに興味が湧いた。」

悪魔とは俺が討つべき存在だと言うのに、その悪魔と同居しようと思うなど、全く以て滑稽な話かもしれないけどな」

快活な笑みを浮かべるレイさん。

その表情には、仮にも悪魔である私に対する警戒などまるであり

ませんでした。

そもそも悪魔……それも精を絞り、男性の心を奪う淫魔である私に、同居を提案するなんて正気の沙汰ではありません。

「正気ですか、私は淫魔ですよ？ 私があなたから殺されるのを何とか免れるために口八丁を並び立て、後に然るべき報復……つまり夜這いする可能性も無いわけではありません。」

そんな私に同居の提案をするなんて」

「ふむ……では夜這いされたときは、後先考えずに楽しむとするさ」「な、何を言ってるんですか？！ そんなことするわけないでしょう？！」

「はははっ！ やはりエリーならば大丈夫そうだ、気にせず屋敷に来い！」

再度、快活に大笑いするレイさん。

夜ですし、もう少しポリュームを落とさないとご近所の迷惑になつてしまいますよ。

そして私は、レイさんにはこの手の話題は逆効果であることを学んだのでした。

もう休ませてください……

提案（後書き）

一応、世界観の設定なども作っております。
次回辺りで、レイの身分的な物が分かるかも。

ご感想やお気に入り登録してもらえると、励みになります！
アルファポリスのランキングにも参加しているので、ポチッとワン
クリックしてくれると嬉しいです！

都市紹介：ゲラベル（前書き）

三回更新……だと……？

都市紹介：グラベル

名前：商業都市国家グラベル Name: Commercial town state Gravel

大陸で最も商業が繁栄している都市。

都市面積の5分の1はなんらかの工業地で、常に熱した鉄などを打ちつける音が鳴り響くことと、商人たちの活気の良い声が止まないことから、眠らない都市とも言われている。

5分の1を工業地なのにも関わらず、残りの部分だけでも他の大国の倍ほど大きな大きさがある。

工業地区からの騒音のため、グラベルの家々は防音構造の成された状態で建っている。と言っても、工業地区から居住区などは離れているので、大きな意味は成さない。

また、針から剣、斧、大刀と、多種多様な武具を産出しているため、商人だけではなく、刃物を使う職業も多く滞在している。

工芸品などのアーティファクトも多く、それらも国家資産の収入源になっている。

それに、その武具の種類が多さから、様々な職種の育成機関としての顔も持っている。

第二学区には戦闘技術や、戦場での指揮、兵法の教育などを主な学科とする学校も存在している。第一学区は一般的な教養を身に付けるための学校が存在する。

そして、各国には『冒険者』と呼ばれる者たちの機関『ギルド』が存在し、グラベルにも支社が無論ある。

ギルドは国民から王族まで、幅広い人間からの依頼を受ける。報酬の依頼は数割をギルドが得て、残りは依頼をこなした冒険者などが受け取る事になっている。

ギルドの得た報酬金額は、ギルドの資金にしたり、国への税に使われる。

冒険者とは別に、国を守る者を『国兵』といい、これは国の王族の命令により行動する兵隊だ。

『国兵』というのは国に就く兵士という意味での総称で、騎士や、王族の近衛兵や、一般兵、神殿兵、神殿騎士といった諸々の兵を含む。

国に雇用されて『傭兵』と呼ばれる冒険者たちもいる。

都市紹介：ゲラベル（後書き）

またその内別の場所で、設定集などを作るかもしれません。
ここで紹介を入れると邪魔だ！という方がいらっしゃるかもしれません。
ごめんなさい。

ご感想やお気に入り登録してもらえると、励みになります！
アルファポリスのランキングにも参加しているので、ポチッとワン
クリックしてくれると嬉しいです！

承諾

どうも、淫魔のエリザベスです。

最近は……三人の悪漢によって貞操の危機に瀕している所を、レイさんによって助けられたり。

結局足腰立たなくなった私を、お姫様抱っこで家まで送ってもらい、その後レイさんが、治安の悪い地区に住む私の身を案じてくれて、『俺の屋敷に住まないか？』とお誘いを受けたりしていました。

「どうでしょうか……」

レイさんに家まで送ってもらった夜の翌日、漸く体が動くようになった私は、リビングで紅茶を飲みながら、昨晚のレイさんからの提案について考えていました。

提案を『申し訳ないです！』と、頑なに断りつづけていた私でしたが、レイさんは『そうだ、ならばこうしよう』と何かを閃き、私に幾つかの条件を提示しました。

レイさんの言う条件はこのようなものでした。

『屋敷の一部屋を貸す代わりに、部屋の掃除や管理は自分ですること』

当然です。私とて借りる立場になれば、そのくらいはしないと申し訳がたちません。

『俺が使用人に頼んでいるのは、屋敷の掃除や管理のみだ。炊事洗濯などの、俺の身のことは頼んでいない。端的に言えば料理を作

つてくれ、もう加工食品は飽きた』

これも、料理くらいならば大した手間もありませんし、問題ありません。

自分の一人の分が、二人分に増えるだけですものね。

ただ、最後の一つが……

『俺の右腕になってくれ』

もちろん、物理的な意味ではありません。

私も右腕一本を犠牲にしてまで、レイさんの屋敷に住みたいとは思いません。

この話をした時に、レイさんが私に改めて自己紹介をしてくれました。

何を隠そう。レイさんはこの国の^{グラベル}『魔法騎士団』の団長らしいです。

何でも新生の団らしく、比較的若い、そして有能な騎士を募って作り上げた団と言っていました。

レイさんは18歳になったばかりだそうです、名のある貴族の生まれで、尚且つレイさんの実力も折り紙付きらしく、王様からお声が掛かったそうです。

つまり。レイさんの言う右腕とは、仕事上での補佐役的な意味を示すようです。

飯にも悪魔ですので、多少の戦闘をこなすことも出来ますし、事務仕事でしたら魔界に居る頃からやっていて慣れています。

お給金も貰えるようですし、良いことづくめであることは確かです。

確かなのですが……

「男性と同じ屋根の下、共に暮らすと言うのは如何なものでしょうか……夜になると使用人の方も居なくなるようですし……」

迷います。

レイさんは命の恩人で良い方ですが、やはり男性と同居と言うのは……。

正直な事を申し上げますと、実は私は『男性恐怖症』です。昨晚のように、男性に性的な暴力を受けそうになったことも一度や二度ではありません。

私が何度も転勤を繰り返している理由がそれです。でも、他の男性に比べるとレイさんは格段に優しく、素晴らしい御人ですし、暖かい人ですし……

「はあ、いくら考えてもキリがありません……。と、というか、どうして私はレイさんの事ばかりを基準に考えているのでしょうか……？」

そうです。

今私が悩むべきは、男性と同居することを私が良しとするかしないかです。

……いやいや。でもやっぱり同居するとなると、優しくて信頼出来るような方が良いのは事実です。

同居人も重要なポイントの一つですね。

その点レイさんは、女心を知らないところもありますけど、騎士道精神的にも彼の紳士さを見ても信頼は出来そうです。

というか、私に女心云々を言う資格は無いですね、私も男心が分かりませんし。

「もうすぐお昼を過ぎてしまいますね……」

昨晚レイさんは『明日の昼頃にまた来る』と言って帰っていきま
した。

レイさんが時間にルーズな人でなければ、もうそろそろ家に来る
頃でしょう。

「それなのに……まだ答えが決まっています……。
そう言えば、男性を自分の家に入れたのは初めてでしたね」

人間界に来てから、初めての事ばかりです。

「せっかく来てくれて、何も出さないのは失礼ですね。レイさんは
紅茶は飲めるんでしょうか……？」

思い至った私は、椅子から立ち上がり手慣れた手つきで新たな紅
茶の準備を始めます。

魔界に居た頃は遊ぶ友人も居なかったので、家の中で出来るイン
ドア派の趣味を多く持っていました。

紅茶を入れることが出来るのも、その名残です。

「男の人は、砂糖は入れないんでしょうか……？」

偏見でしょうか？ とりあえず、机の上に角砂糖を置いておきま
す。

丁度お湯も入れ終わり、準備が出来た頃に、見計らったとも思え
るタイミングで玄関を叩く音が響き渡ります。

『エリー、俺だ』

「あ、はい。今開けますね！」

待たせる訳にもいきません、素早く玄関戸を開けます。

戸を開けた私を見たレイさんは、驚き寄りの表情を浮かべていました。

「その恰好はまさか？」

「はい元の姿です。人目ありませんし、それにレイさんには淫魔だつてバレてますもん」

「それはそうだが……な、なんというか、中々に前衛的で色香漂う恰好だな……！」

「ええ?! そ、そうでしょうか……?」

レイさんに言われて、自身の体を見下ろします。

人型の時のような服装ではなく、魔力で構成されている淫魔の一般的な服装です。

とは言え、流石に他の淫魔と同じ服装だと、肌の露出面積が多過ぎるので、私は肌は最低限しか曝はらしていないはずなのです……。

「ですがこれで前衛的ならば、他の淫魔たちの恰好は時代を先取りしているレベルだと思いますよ？」

それに肌も露出も少ないと思うんですが……?」

「確かに露出は少ないが……何と言つか服がピッタリとしすぎていて、その、か、体の線が……」

言われて気付きましたが、確かにピッタリとしているかもしれない。せん。

魔界は人間界に比べて寒いので、いつも外套などのコートを着ていたので気にしたことはありませんでした。

肌の露出を無くすことばかり意識していたせいで、他の部分が完全に疎おろそかになっていました……。

さらに、レイさんに言われたせいで、妙に恥ずかしくなって来ました。

普段は当たり前と思っていたのに、急に根底の部分を覆されたせいで、羞恥も倍です。

「あ、あのー。出来ればあまり見ないでください……」
「す、すまん！ これ、使っていいぞ」

胸元やらを隠し、羽織るものを探した私に、レイさんは一つ謝罪を述べると、自分の上着を差し出してくれました。

それを断るには、羞恥の力が強すぎて無理でした。
有り難くお借り致します。

「と、とにかく上がってください！ レイさんは紅茶は飲めますか？」

気を取り直して声を張り上げた私に、レイさんは頷く事で返事をしました。

椅子に座り紅茶を差し出すと、お互いに言葉も無く、しばらくはティータイムを堪能しました。

………私には少し重苦しい空気でありましたが。

「で、どうする、もう決めたのか？」

お茶を飲み終え、私が片付けを済まして椅子に座り直すと、レイ

さんから話を切り出しました。

「……まだ、少し悩んでいます」

「ふむ……何に対して悩んでいるのかは教えてくれるか？」

「やはり、男性と同じ屋敷に住むのは抵抗があると言いますか……それに夜には二人きりになるのでしょうか？」

「初心うぶな淫魔も居たもんだな……」

「すみません……」

実際、それで踏ん切りが着いていないのですから、言い返せません。

かと言って。今のこの家で暮らしたいわけも無いですし、実質答えは決まっているようなものなのですが、それでも首を縦に振るのには勇気が要ります。

「やっぱり、男の人は……怖い、ので……」

「……それは昨日の一件が原因か？」

「いいえ、人間界に来るずっと前からです。」

向こうで仕事をしている時にも、何度か男性に……襲われそうになった事があったので……。

触れられるのは怖いですし、近寄られるのだって怖いです」

レイさんが、昨晚私を抱き抱えたことでも思い出したのか、表情を悲しそうに曇らせる。

そんなレイさんを見て、何故かとても酷いことをしたような気分になりました。

……決意します。

「でも……でも、レイさんは他の男性とは違う気がします。昨日抱っこされた時も、怖くなかったです。なんだか……あったかかった

です。だから……」

「……………」

「お家にお邪魔させてもらっても良いでしょうか？」

レイは、呆気にとられた顔をしています。

それもそのはずですよ。話の流れからして、断る雰囲気醸し出していたと、自分でも思います。

「人間と悪魔だと、文化の違いもあると思います。

ですので、その点はご指導のほどよろしくおねがいしますね」

まあ、初めてばかりのことです。

今更新しいことが増えたところで、大きな変化はないでしょう。それに、自分自身の成長（男性恐怖症の克服を含め）にもなると思います。

うん！ レイさんですし、大丈夫ですよ。

承諾（後書き）

ちよつと短めかな？

ご感想やお気に入り登録してもらえると、励みになります！
アルファポリスのランキングにも参加しているので、ポチッとワン
クリックしてくれると嬉しいですよ！

お買い物 1

どうも、淫魔のエリザベスです。

最近、レイさんのお屋敷に住まわしてもらうことが決まり、色々忙しい時間が続いています。

魔界から人間界に引越したというのに、来て早々にまた引越します。

良い家だったのに、たった一日しか使ってあげられなくてごめんなさいね。

今は荷物の整理を行っているところです。

と言っても。大体の衣類や生活必需品などはこちらに来てから買うつもりでしたので、荷物は多くありません。

レイさんは、出した紅茶とお菓子と戯れてもらっています。

取りあえずレイさんのお屋敷に行く前に、服を買いに行かせてもらいましょう。

持ち合わせている服は、昨日の一件（木への墜落）でボロボロになっしまいましたし。

今後は人型でいる機会も増えることでしょうし、何着かは困らない程度に買っておく必要があります。

「お待たせしました。住民課へは後日行くことにします。持ち合わせの服が無いので、服を買いに行きますから、先にお屋敷に戻っていてもらえますか？」

リビングに戻り、丁度紅茶もお菓子も食べ終えたレイさんに声をかける。

「いや、服くらい付き合っ。

それに、まだこちらでは分からない事が多いだろう？ 服を売っている店くらいなら紹介できる」

「ふむ……それではお言葉に甘えます。ご案内よろしく願いします」

腰を折って、しっかりとお礼をします。

大通りの店を一軒ずつ見る手間も省けそうですし、時間の短縮にもなりました、レイさんに感謝です。

「上着はそのまま着ておけ。エリーの体格なら大きいぐらいだし、裾の短いマント代わりくらいにはなるだろう？」

「あ、感謝します……」

衣服が無い現状、全裸で外を歩くのは、羞恥を通り越した何かを発見に目覚めるきっかけになり兼ねません。

……いや、やりませんけどね？

「しかし、下着だけでも無事で良かったです。流石に下着無しで街中を歩くのは、レベルが高すぎますしね……」

「違ういな」

クスリと笑うレイさん。

やはり笑い顔は、そこいらの少年たちと同じ可愛らしい笑みです。

「丁度昼時で通りや市場も賑やかだろう。ついでに眺めるのもいいかもな……じゃあ行くか」

「あ、はい！」

レイさんは椅子から立ち上がると、軽く伸びをして外へ続く扉へ

と歩きはじめた。

私も荷物を背負い後に続き、活気に溢れるグラベルの街へと赴きました。

「ふわぁ……やっぱり夜よりも人が多いんですね！」

大通りは人で溢れていました。

夜に比べて、商人や一般人が多く見えます。

やはり商業大国の大通りと言ったところでしょうか、人は驚くほど多いけれど、それでも通りには空間のまだ余裕があります。

「祭がある季節は、この通りが人で埋め尽くされるんだぞ？」

「この通りがですか！」

驚きです。

魔界では人が何処かの場所で溢れ返ることなんてありませんでした。

キヨロキヨロと視線を巡らす私を、レイさんは面白そうに眺めています、何が面白いんでしょうか？

目に見えるものの全てが新鮮に写ります、美味しそうに輝く、甘そうな柑橘類の果物なんて魔界では滅多にお目にかかれません。

機会があれば口にしてみたいなあ……

「それを一個くれないか？」

私が物欲しげな視線で、件の出店の果物を見ていると、不意にレイさんがその店の店主に言いました。

「レイさんが選んだのは、私が見ていた赤色の果物でした。『うえいー！ 兄ちゃんありがとよっ！』と、威勢の良い声を上げる店主から果物を受け取ると、そのまま私に差し出してきました。」

「ほれ」

「え…… 良いん、ですか？」

「あそこまで物欲しそうな目をしていたら、無視は出来ないからなし、失礼な！ 私はそんなに意地汚くありません！」

私はそんなに食い入るように見ていたのでしょうか？

そして、もし本当だったとして、その姿を見られていたとすれば…… 最悪です……。

「ふむ、要らないってことか…… じゃあ俺が食っても？」

「ううー…… 頂きます、欲しいです……！」

「くくっ、最初からそう言えばいいんだ」

俯きながら差し出された果物を受け取る私に、レイさんがからかい混じりの声をかけます。

「ありがとうございます……」

しかし、どんな時でもお礼は忘れません。

「おい兄ちゃん、あんまりイジめてやるなよ？
まあ、良い客寄せになって良いんだがな！」

私たちのやり取りを一部始終見ていた店主にそう言われ、辺りを見回すと幾許かの人が笑いながら私たちを見ていました。

レイさんは涼しい顔をしていましたが、私にとっては恥ずかしさに拍車をかける以外の何物でもありません。

「も、もう早く行きましょうレイさんっ！」

私はそれだけ言って、さっさと歩きます。

「まあ、そう怒るな。早く食べてみる？」

後から追い掛けて来たレイさんにそう言われ、食べ物に吊られて気分になりつつも、果物を口にやります。

『シャクツ』と小気味よい音を立てる。

口の中に入った果実を噛むと、驚くほど簡単に果肉が噛み切れて、同時に大量の果汁が出ました。

噛むほどに果汁は溢れ、口内に甘みが広がりました。

「……すごく美味しいです！　こんなに甘くて美味しいもの初めて食べました！」

思わず立ち止まってしまいました。

「お、大袈裟じゃないか？　ただの『スカーレットフルーツ』だぞ？」

「これは『スカーレットフルーツ』と言うんですか？」

「いや、正式には『シュガーレッド』という果物だ。まさか知らないのか？」

レイさんが驚いた風に、私に聞き返します。

「魔界では果物は珍しいんですよ？ 食文化も人間界とは全く違いますし、甘い物は少ないですし、香辛料の種類も乏しいです。

食文化に関しては、圧倒的に魔界は劣っていますね……」

「そうなのか。だからこそ、その驚きようか」

「はいっ！ ありがとう、レイさん！」

精一杯の笑顔でお礼を言いました、だって本当に美味しかったんですよ？

と、これでは私が食いしん坊の位置付けになってしまう。

「——別にあれくらい……ほら、早く行くぞ」

レイさんは何故か顔を赤くして、私から顔を背けるとさっさと歩き始めてしまいました。

「あー、はい！」

疑問に思いつつも私も歩き出し、再び二人で服屋を目指します。

「レイさん……私、こちらのお金はあまり多く持っていないのですが……」

レイさんに連れられて来た店は、いかにも貴族御用たちの商品の平均価格がふざけたインフレーションをしてそうなお店でした。見るからに高そうです、何故こんな曖昧な事を言っているかと言うと、商品に値段が書いていないからです。

値段の書いていない服屋なんて初めてですよ。

「ここは……少し高そうですし……？」

庶民的思考の私には、踏み入り難いお店です。もう入っています。

手持ちのお金では、ここにある一着すら買える気がしません。三十六計走るを上計となす、直ぐさま逃げましょう。

「そう硬くなるな。心配しなくても、金は払わなくてもいい」

ジリジリと後退し、店の外へ出ようとしていた私に、レイさんが声を掛ける。

「この店は、俺の家の『モノ』だ、商品自体は原価以下で買える。適当に見繕って選んで来い」

「『モノ』って、経営者なんですか？！」

「と言うよりかは、創立者だな。俺の代ではなく、数代前が作ったらしい」

レイさんは軽く言い切ると、『さあ、早く選んで来い』と言葉で私の背中を押します。

しかし、良いのでしょうか……

「先程から、ずっとお世話になりっぱなしで……良いんでしょうか

「？」

「良いつて言ってるだろう……？ あ、いや待て」

「え、はい。何でしょうか？」

「一着だ。上下合わせて一着は俺に選ばせてくれ」

つまり、私の服の一着を選び立てるということでしょうか。

「それくらい、もちろん構いませんが——」

「——よし、じゃあ始めだ！」

レイさんはそう言つと、サツさと店の奥へと消えて行つてしまいました。

「意外に破天荒なところもあるんですね……」

レイさんが居なくなつた後に、そんなことを呟きます。

レジのあるカウンターを見ると、店員らしき人が苦笑して『ごゆつくりどうぞ』と視線を送り、お辞儀を一つしてくれました。

私もそれに礼を返し、自分も服を選ぶために店を歩きはじめます。

「さて……選びましょーっとー」

お買いもの1（後書き）

長くなりそうでしたので、1と2に分けることにしました。

ご感想やお気に入り登録してもらえると、励みになります！

アルファポリスのランキングにも参加しているので、面白かったらポチッとワンクリックしてくれると嬉しいです！

お買い物2

「さて……選びましょーっと！」

魔界では服屋なんてありませんでしたし、個人的に職人に頼んで作ってもらうくらいしか、服を得る方法なんてありませんでした。食文化や衣類などの技術的な分野では、魔界は人間界に遥かに劣っているんですね、これも『視察』の報告書に書いておきましょう。

そして私も女です。

お洒落に興味がないと言えば嘘になります。

食事はレイさんのお屋敷で賄ってくれるようなので、ある程度のお金は残しておいて、少し多く服を買ってみても……いえいえ、まだ人間界には居るのですし、そんなに焦る必要はありません！
そういえば、一着当たりどれくらいの値段になるのでしょうか……？

レイさんは『原価よりも安く買える』と言っていました。でもここは外装、内装ともに貴族が来るようなお店です。

彼らの『安い』の基準と、私の安いは違う可能性もあります。

参考程度に店員さんにお聞きしてみましょう。

「す、すみません、こちらは一着でどれくらいするのでしょうか……？」

考えてみれば、人間界に来てレイさん以外の人間と話すのは、これが初めてです。

緊張して少し声が上擦うわすってしまいました。

良く言えば整然とした、悪く言えば堅苦しい制服を着た女性の店員の方は、そんな私の様子を見て『家からあまり出ない貴族の箱入

り娘』とでも思ったのか、頬を緩めました。

「レイライト様のお客人と言うことで、一律で『グラベル銅貨3枚』
となっております……」

ちなみに、一般的に商品の売買には銅貨が使われます。

主に取り分で使われるのは銅貨や精々銀貨で、金貨などになると商人間での大きな取引くらいでしか使われません。

銅、銀、金の硬貨にはそれぞれに様々な種類があり、各硬貨によって市場での価値が違います。

価値の基準となるのは、名前を冠^{かん}する金属の含有量で決まります。主に銅、銀、金の効果に混ぜられるのは錫^{すず}です。

例えばAとBの銅貨があったとして、Aの銅含有量が錫との比率で『5:5』、Bが『6:4』だと、Bの方が価値が高くなります。

今、店員さんが言った『グラベル銅貨』は、この国の象徴硬貨^{グラベル}です、もちろん国民や商人からの信用度もありますし、価値も高いです。

その時々によって価格は変動しますが、銅貨一枚で外食一回分くらいです。

この値段ですと、服は当然……

「そ、そんなに安いんですか?!」

「余談ですが、通常ならば値段は——」となっておりす」
「……ありがとうございます」
「はい、ごゆつくりとお選びください」

店員さんは笑顔で見送ってくれましたが、口にした値段は凶悪な悪意を感じるレベルでした。

高いとかではないです。少なくとも今の私の手持ちでは遠く及ばない値段でした。

「やっぱりあまり沢山買うのは止めましょう……なるべく安そうなのでいて『目立たない』服を……！」

それから約1時間、初めての服選びに四苦八苦しながらも、なんとか上下3セットの服と下着数枚を選ぶことが出来ました。

人間の穿く下着と言うのは、どうして表面積の少ない物が多いのでしょうか。

なるたけ広い面積の物を選んだので抜かりはありませんっ！……

……何に對しての抜かりなんでしょうか？

ノーブラで過ごす変態的な趣味は持ち合わせていないので、ブラもいくつか買いました。

「エリー。もう買い終わったのか？」

「あ、レイさん。はい、数着買わせてもらいました。ありがとうございます！……」

会計を済ませた後、私と同じ布袋（服の入った）を持ったレイさんが後ろから声を掛けてきました。

会計は銅貨28枚でした。高い買い物ですが、服の質を考えれば

安い物です。

残りのお金は半分以下になってしまいましたが、思ったよりも安く済んで助かりました。

「そっちの小さい袋は何だ？」

「こっちは――」

私の持った二つの袋のうちの、小さい方を指さす。

「……その他諸々です」

「ブラ的な物か？」

「もうちょっと包み隠してやんわりと言ってくださいっ！」

「ちなみにサイズは？」

「言つか馬鹿っ！」

時たま紳士さが全く無くなりますね、女性に対するデリカシーを持って頂きたいです。

まあ、今まで女性関係が無かったので仕方ないのかもしれませんが……

ちなみに私のサイズは……内緒です。

「ははっ、すまんすまん。ほら、受け取れ」

カラカラと笑い、自分の持った袋を私に突き出しました。

「さっき言っていた通り、一着選ばせてもらったぞ。まあ、また着て見せてくれ」

「あーう、ありがとうございます……」

「ホントに良い反応するな、エリー？」

「……………」

からかわれていました。

女生徒の關係が無かった癖に、どうしてこんなに誑^{たら}し癖があるんでしょうか。

まさか……レイさんは天性の女たらし？

このままでは私もレイさんの毒牙にやられる日が来るのでしょうか……注意は怠らないようにしましょう。

「ありがとう、また来るよ」

「はい、ありがとうございましたレイライト様」

私が脳内で何かと戦っている最中に、レイさんは店員さんに別れを告げ、店の外へと出て行ってしまいました。

「あ、待ってくださいー」

「エリー。飯を作ってくれと頼んでいたが、料理は出来るのか？」

「魔界では一人暮らしをしていたので、一応出来ますよ。だけど、あまり自信はないので、過度の期待はしないでくださいね」

「ふむ……ところで気になったのだな」

「はい……」

店から出たレイさんが、私を振り返ります。

「エリーはこっちの料理は分かるのか？」

「……………おお！」

よく考えてみれば、まだこちらの食文化には疎いんですた。

人間界に来る前に色々と資料を見たので、料理の作り方までは行かなくても、外見くらいならばわかります。

作り方に関しては……まあ魔界での料理の応用で何とかなると思っています。

でも流石に失敗して、美味しくない料理をレイさんに出すわけにもいけませんので、軽い料理指南書なんかを買っておきました。

「おいエリー、まだかー？」

レイさんのお屋敷の台所を借りて調理を進めていたところに、腹を空かしたレイさんが乱入してきました。

既に3回目なので、特に気にしません。

「もう、さっきから5分おきに来てますね。もうすぐ出来るので、広間で待っていてください……ね？」

「んん、分かった……しかし、人の作った料理と言うのは物心付いてからでは久々だからな。

精々騎士団の訓練中に、ローテーションで担当になったむさい男の大雑把な料理しか食ってない。

故に楽しみなんだ！」

「そ、そんなに期待しないでください。私もこちらの食材には不慣れですから……」

しかし目を期待でキラつかせているレイさんを見ると、手は抜けません。

私が出る限り、最高の出来にしましょう。

「でも良い匂いだぞ？」

「あー、駄目です駄目です！ 覗かないでください！」

私の傍に寄って、フライパンの中身を覗き込もうとしたレイさんを、手に持ったお盆で押し返します。

「良いじゃないか、ちょっとくらい！」

「駄目ですー！ 途中で見られたら何を作ってるかバレちゃいますし、何より楽しみが無くなってしまいますよ？」

「う、分かった……じゃありビング待つてるぞ」

「はい、直ぐにお持ちします」

仕方ない、と渋々引き返すレイさん。

とは言え、もう味付けも済ましましたし、後はお皿に盛りつけるだけです。

温かい料理が冷えないように、お皿は事前にお湯に浸しておいています。

「まあ……最初にしては上出来ですよね？」

さて、持っていきましょう。

リビングに入ると、20人は座れそうな長机にレイさんが俯いていました。

それにしても、途轍もなく広いお屋敷です。

台所からリビングまで、料理を持っているとは言え1分強掛かってしまいました。

「レイさん、お待たせしました」

「おお、やつと来たか！」

私が声を掛けるとガバッと起き上がり、喜々とした視線を向けてきます。

まるで体の大きい子供です。

お盆に載せた料理を、レイさんが座る机に置きます。
温めた皿が功を制したのか、まだ料理は熱いままです。

合いびき肉を捏ねて、少し厚みのある楕円形にして、少し焦げが付くくらいまで焼き火を中まで通します。

その後に、事前に作っておいたソース（こちらも温めておきました）を焼いた肉にかけます。

つまり、私の作った料理はハンバーグと言われるものです。

流石にそれ一つでは寂しいので、幾つかの野菜を刻んだサラダと、マッシュポテトを添えておきました。

ソースには、台所の棚に入っていたお酒を少量加えたので、良いアクセントが付いていることを祈ります。

「おお、加工品じゃない！」

「作っただんですから当たり前じゃないですか」

当たり前前の事に驚き、喜ぶレイさん。
やはり背の高い子供に見えます。

「食ってもいいか?!」

「はい、どうぞ。あ、でも……初めて作ったので、失敗したらごめんなさい……」

「何を言ってるんだ、こんなに美味そうな匂いがするんだ、不味いわけないだろ?　じゃあ、いただきます!」
「あ」

それ以上私が何か言う前に、レイさんがまだ湯気の出るハンバーグに齧りつきました。

目を閉じてムグムグと口を動かし……呑みこむ。

「……………」

「あの……美味しくなかった、ですか?」

「いや、やば美味い……」

ボソリと呟くと、食べることだけに集中して口を利かなくなってしまう。

本当に美味しそうに食べてくれたので、とても嬉しかったです。
あまり沢山食べるほうではないので、私の分もレイさんに差し上げたら、更に喜んでいただけました。

「いやあ、エリーを屋敷に呼んで正解だった。これから毎日こんな料理が食えるなら、これだけでも十分だ……」

「も、もう大袈裟ですよ……」

流石にここまで手放しに褒められると、少し恥ずかしいです。

「いや、でも本当に美味かった」

「じ、じゃあ、ありがとうございます……」

「ん、部屋は俺の隣の部屋を使ってくれ。といっても結構離れてるけどな」

「隣、ですか？」

「別に夜這いを仕掛けたりしないって、むしろ逆だろう？」

「私はしませんっ！」

「分かってる分かってる」

隣と言うことは、二階の部屋でしょうか？

あれ、と言うことは私が昨日寝ていたのは……

「もしかして、昨日私が寝てた部屋は……？」

「ん？ ああ、あれが俺の部屋だ」

やはりですか、いやなんとなく分かってましたけどね。

「男性の布団で寝るなんて……不覚です……」

「？ とにかく、あの部屋の隣だからな？ 風呂に入りたければその通路を真っ直ぐ行けばいい」

「風呂ですか？」

「ああ、風呂だ」

「それは何ですか？」

私の発言に、目を丸くして『何を言ってるんだこいつは』と目で訴えかけてきます。

何か可笑しいことを言ったでしょうか。

「エー！。少し聞きたいんだが、普段体を清潔に保つにはどうする？」

「浄化の炎で汚れを落とします」

「なるほど、そういうことか……良いか、風呂と言うのはな？」

この後、講義を始めたレイさんの話を要約すると。

風呂とは、魔力に乏しかったり魔力の無い人間には『浄化の炎』は使えないため、体の汚れを落とすためにお湯で体を清める、ということでした。

娯楽にも使われるらしく、少なくともグラベルでは広く普及しているとのこと。

そう言えば、資料で読んだ記憶が……

「ともかく、入るなら好きにしてくれ。俺はそうだな……二時間後に入るから、それまでに入ってくれ」

「あ、わかりました！」

「もし入ったら、俺の選んだ服でも着てくれよ」

それだけ言い残すと、レイさんは自分の部屋へ帰って行ってしまいました。

「……取りあえず洗物ですね。」

その後に、お風呂と言うのに入ってみましょう」

外もとつぷり暗くなり、ようやく一日が終わりました。
悪魔、それも淫魔である私にとってはこれから『朝』みたいな

ものですが。

まあ、だから寝ないでいる必要ありませんし、お風呂に入ったり今日はゆっくり休むことにしましょう。

お買い物もの2（後書き）

と、こんな感じです。

次回はお風呂と、エリーの服のお披露目かなあ。

ご感想やお気に入り登録してもらえると、励みになります！
アルファポリスのランキングにも参加しているので、面白かったら
ポチッとワンクリックしてくれると嬉しいです！

おやすみなさい（前書き）

突然ですが一章、最終話です。

おやすみなさい

どうも、淫魔のエリザベスです。

レイさんのお屋敷の『お風呂』にお邪魔しています。

熱いお湯に入るようなので、服は予め脱いで入らないといけないようです、お風呂の前に服を脱いで置いておく為の脱衣所もありましたし、確かのです。

とは言え、着ているのはレイさんにお借りしているパーカーと下着だけなので、脱ぐの自体は一瞬です。

いつまでも人型だと、少量とは言え魔力を消費するので、服を脱いだら悪魔の姿に戻りました。

服を籠かごの中に入れて、いざお風呂へ向かいます！

「……霧？」

風呂への戸を開けた私の目に入ったのは、一面を埋め尽くす霧でした。

しかしそれは温かくて、霧とは正反対のものでした。

「湯気……か」

湯気です。

どうやらお湯から出ているようですが、これだけの量の湯気ということは、結構な温度なのでしょうか。

取りあえず、思い出した資料通りに、髪の毛と体を洗うことから始めます。

髪は洗髪料という液体で洗います、これが意外に良い匂いで、果物の匂いがしました。

洗髪料一本にしても、高価そうです。

体は柔らかい布に専用の液体を付けて、泡立てたあとにそれを体に擦るようにしました。

こちらも前者同様に良い匂いです。

何と言うか、流石に貴族のお屋敷ですね。

「ふう……何とも手間が掛かりますね、魔力一つで不便になるものです」

体を洗い終えて、水で泡を流す。

初めての試みでしたし、少し手間取ってしまいました……。

「では早速お風呂に入ってみましょう」

一人で使うには余りにも巨大な浴槽に片足をチャポンと入れます。

「——熱っ！ 普通に熱すぎる?!」

水を入れましょう水を！

って、この広さだと幾ら入れても時間が足りませんね……レイさんの入って来る時間になってしまいます。

「ゆっくりなら……」

ゆっくり、ゆっくりと足を入れる、これなら大丈夫そうです。

数分ほど繰り返すと、肩ほどまで浸かっても全く気にならなくなりました。

そして、思っていた以上に……

「気持ちいいですねえ……」

体が芯から温もり、これがなんとも至福です。

これならいつまでも浸かっていられそうです……それに、痛めていた体も癒されていくようです。

「ふう、人間は中々に良い物を作り出すんですね……でも何でしょう……浸かっていると頭がぼーっと……」

……！！

——リー……！！

「起きろエリーー！！」

目を覚ますと、レイさんの顔がありました。
今まで見たことの無い焦りようで、私の名前を必死に叫んでいました。

「レイさん……？ どうしたんです、つつ……」

体を起こそうと体に力を入れたら、不意に視界が紫一色に汚染され、吐き気を催すほどの眩暈に襲われました。

「うつ……気持ち悪い……」

「まだ寝てる、湯に浸かりすぎて上せたんだ。注意してなかった俺の責任だ、ごめんな」

レイさんは優しく言つて、私の頭を愛おしみすら感じさせる手つきで撫で、髪を梳いてきました。

「上せた……？」

「ああ、湯に浸かりすぎたせいだ。

あー、後……湯冷めして風邪でも引いたら事だから、体を拭かせてもらった、ぞ……？」

「からだ……体か、体？」

「すまんっ！ 昨日みたいに使用人も居なくて、俺がやるしか……」

首を動かし自分の体を見ると、体に付いた水滴は綺麗に拭き取られていました。

ついでに、申し訳程度にバスローブが巻かれていました。

「他意はありませんでしたか……？」

「も、もちろん——」

何度目になるか、羞恥に震え問い掛ける私に対して、レイさんは続きを言い終える前に、言葉を途中で途切れさせました。

「——本当は他意ありまくりました」

「やんわりと言えば良い訳じゃありませんよ？！」

「いや……最初は心配で焦って必死で助けたんだが、脱衣所まで連れてきたら、急に頭が冷めてな……そんな状態でエリーみたいな可愛い子の裸体があつたら、意識せずにはいられるか、いや無理だ。いや、むしろ何もなかった俺を褒めてくれよっ！」

「開き直らないでください！」

何か言い残したいことはありますか……？」

「……良い体してました！」

「も、もうさっさと出てけー！」

ピューと、疾く風のように脱衣所から逃げ去る。

しかし扉を閉めるのは忘れません、妙なところでしっかり者スキルを披露しないでください。

「二度までも……しかも今度は全裸を見られるなんて……。ツエペルさん、エリーはふしだらな子になってしまいました……」

とは言え、レイさんに助けてもらったのは確かですよ……取りあえず、速く服を着て部屋に戻りましょう、本当に風邪を引いてしまいます。

「やっぱり何回見ても広い部屋ですね……」。

本当にこんな部屋を使ってよかったんでしょうか」

部屋に入って一言。

魔界にある私の家の私室の軽く数倍の大きさはあります。

やっぱりさっきのは不味かったかもしれません……。

結局この前も、今回も、レイさんは悪いことは何一つ……というわけではありませんが、好意からしてくれたことなんですよね。

それで私がした事と言えば、一回目は頬を引っ叩いて、二回目は

大声で喚き散らしてしまいました。

今から謝りに……いえ、夜分に失礼ですね、明日の朝食の時間にしっかりと謝りましょう。

朝食もなるだけ健康的な物にして、レイさんが朝から元気よく始められるようにしましょう！

「くしゅっ……取りあえず早く髪を乾かして、寝間着に着替えましょう……」。

あつ、そういえばレイさんが『俺の選んだ服も着てくれ』って言うてましたね」

折角着替えて、濡れた髪のせいで服が濡れるのも嫌ですし、先に髪を乾かしましょう。

人型にも慣れてきましたし、簡易の魔法程度ならば問題なく使用できそうですね。

「……………」

二言三言の詠唱を口の中で呟き、『乾燥』の概念を持った風を召喚します。

魔界、人間界に関わらず『概念魔法』は高位魔術に分類される魔法です。

単一の概念、そしてそれが尚且つ軽度な概念であれば、低位の魔術師にも使えますが、ある一線を超えると使用は倍々に難しくなっていくます。

概念が先頭に関係するモノ、例えば『切断』であったり、それに『燃焼』を付加すると並みの魔術師には詠唱することすら出来ません。

まあ、私も淫魔の端くれですから、この程度の魔法はこなせます。

他の淫魔のように『性』で魔力を蓄え、力を持った淫魔ほどではありませんが、それでもそこらの悪魔以上の実力はありますよ！
とまあ、ですからそんな訳で髪など一瞬で乾きます。

「服は……この袋ですね——う？！」

私が珍妙な声を上げたのは、レイさんにプレゼントされた服が原因です。

「これは……」

黒を基調にしたドレスでした。

スカートの部分は膝の少し下くらいまであり、鬱陶うつとしくなくらいにフリルが付いていて、人目で職人さんが意匠を凝らしているのが分かります。

所謂イブニングドレスと同じで、キャミソールのように腕は全部、背中が少し露出しています。

私の性格を考慮してか、胸元は露出していません。
というかそこを考慮するなら、腕も背中も考慮してくださいよ！
と、心の中で訴えた私に応えるように、袋の中から新たに『ストール』と『ケープ』が用意されていました、どちらも黒なので、どうやら黒に統一したようです。

セットで着るといふ事なのでしょね……一応全部着ると肌の露出は少ないので、問題は……無いんでしょうか？

それより、何よりも言いたいのは……

「ゴスロリ……？！」

いや、確かに童顔かもしれませんがね？ でもこれ着るのって貴族のお嬢様とかじゃないんですか？

いや、私も外見的には……ただでさえ身長低いから気にしてるのに、気にしてるのにつ！

これ着て子供に間違えられたらどうすればいいんですか、これ以上の外見年齢退行は避けたいのですがど——」

コンコン。

「あー、エリー？　ちよつと良い、か……？」

「へ、レイさん？　ちよ、ちよつと待って！　ああ、いや……な、何の用でしょうか？」

部屋でバイオレンスに独り言を放っていて、不意に部屋に響いたノック音と、その後に続いて飛び込んできたレイさんの声に、思わず動揺してしまいました。

「体はもう大丈夫なのか？」

「あ、はい……少し頭を冷やしたら、気分も良くなりました」

扉越しに、レイさんの問いに答えます。

「……………」

「……………」

「入っても大丈夫か？」

「えっ？！　あ、駄目です……まだ服を着てませんので……ちよつと待ってくださいね」

待たせるわけにもいかないので、仕方なく目の前に広げられたレイさんに貰った服に袖を通します。

サイズがピッタリなのは良い事なのですが、何故レイさんは私にサイズが分かったんでしょうか……

余計なことは考えずに、疾く着替えます。

「大丈夫です、どうぞ」

ケープを羽織った所でそう言うと、レイさんが静かに入っていて、私に視線を向けて目を丸くしました。

「その服、着てくれたのか」

「……流石に子供っぽ過ぎますよ？」

「でも、そういうのは可愛い」

「自分が子供っぽいのは自覚してます……他の淫魔の方と比べても、『少々』発育が悪いようですね。」

ところで、私も話したいことがあるんですが……」

「あ、俺が先でいいか？」

視線は合いません。

さっき入ってきたときにレイさんの姿を見ると、思い出して頬が熱くなってしまいました。

なので、失礼とは思いつつぼを向きながら頷くことで肯定の意を示しました。

「すまない。先程の配慮に欠ける行いを許してくれ……」

予想外の謝罪でした。

「な、何を言うんですか！ 悪いのは私です！ 他に手が無く、仕方なくレイさんがあはただけなんですし。」

怒る理由はあっても、謝る理由なんてありません！

むしろ、謝るのは私の方です……助けてくれたレイさんにちゃんとお礼も言わずに、突っぱねただけで……ごめんなさい！」

「いいや、俺も――」

それからお互いに一步も譲らず、謝罪のキャッチボールが数分続きました。

おあいことの形で終結し、笑いあつた後にレイさんが『疲れてるだろう、もう休め』の一言で就寝になりました。帰り際にレイさんが、

「その服、似合ってる」

と言つて、顔を少し紅くして出て行つたのが意外です。言葉にではなく、顔を紅くしたことにです。

「ありがとうございます。おやすみなさい、レイさん……」

私も精一杯の笑顔で返すことで、お礼の意を籠めました。
殊更こゝろから頬を紅潮させたレイさんは、『卑怯だ……』などとボソボソ
呟きながら、部屋へ帰っていきました。

人間界に来て、まだ二日目。

しかし、二日とは思えない程の密度がありました。
ツエペルさんに連絡も出来ていないし、色々と慌ただしかったです
ね。

明日からは『視察』としての仕事もレイさんの右腕としての仕事
も、両方頑張つて行きましょう。

ですが今日は、もう何も考えずに休むことにしましょう。

おやすみなさい。

おやすみなさい（後書き）

衝動で書いた小説の為、プロットもなく色々と分かりにくい部分もあると思いますが、それでも読んでくださっている方、本当にありがとうございます。

次章からは、騎士団でのお話がメインになってくるかもしれませんがファンタジー要素も多く盛り込むかもしれませんね。
ご指摘などあれば、お気軽お気軽に言ってください。

ご感想やお気に入り登録してもらえると、励みになります！
アルファポリスのランキングにも参加しているので、面白かったらポチッとワンクリックしてくれると嬉しいです！

魔法騎士団（前書き）

新編開始します！。

魔法騎士団

どうも、淫魔のエリザベスです。

現在はレイさんのお屋敷で一夜明けて、二日目の朝です。

人間界に来ては習慣とは変わらないもので、いつも通り起きれました。

人間界の朝は空が青く、空気も澄んでいて、なんとも清々しくて気持ちが良いです。

魔界の空は暗く淀み、いつも暗鬱あんつとした空気が漂っています。

悪魔であれば、魔界を居心地良く思うものなのかもしれませんが、私はそうは思いません、人間界の朝の方が私には合っているような気がします。

「んー……ふう！」

ベッドから起き上がり、日課通りに息を大きく吸って伸びをして体をほぐします。

「さあ、レイさんはもう起きているんでしょうか？」

起きているなら、早く朝食を作らないとイケませんね」

日が昇って間もないですし、まだ起きてないとは思いますが、急ぐに越したことはありません。

早く顔を洗ったり歯を磨いたり、身支度を整えなくては。

起きた時に温かい朝食が出て来た方が嬉しいに決まっていますもんね、これも私の仕事の一つですし、しっかりと頑張ります。

素早く身支度を整え、レイさんに頂いた服に袖を通し（シワになつたら嫌なので、寝るときには別の自分で買った服を着ました）で、

キッチンへと向かいます。

レイさんの部屋の前を通った時には、特に物音もしなかったので、流石にまだ起きていないようです。

「何を作りましょう。朝からあまり重いものを食べても、昼頃に胃がもたれてしんどいですよね……」。

トーストと卵、後サラダにしましょう。定番^か且つバランスもいいです。飲み物は冷蔵庫の中ものを頂きましょう」

そうと決まれば、早速取り掛かります。

まあ、簡単なので10分くらいで終わりますね。

「卵は半熟で良いんでしょうか……？ 大丈夫ですよ……」

途中不安にもなりましたが、予想通り10分足らずで完成しました。

冷えたら美味しくないなので、昨日と同じく温めておいた更に移して、蓋を被して熱が逃げないようにして、二階で寝ているレイさんを起こしに向かことにします。

コンコン。

「レイさん、エリーです。起きてますか？」

ノックして、レイさんに呼び掛けます。

しかし、帰ってくるのは無言だけです、まだ寝ているようです。

「レイさん、朝ですよ！ ご飯も出来ましたよ！」

再度ノックして、呼び掛けますが、またしても返事は無言だけです。

「レイさーんっ!!」

レイさんは相当低血圧みたいです。

どうしよう、このままだと折角作った料理が冷えてしまします、半熟の卵も、白身の部分がパリパリになっちゃったら可哀相です。

幸い鍵は掛かっていませんし、中に入って起こすべきでしょうか……。

「レイさーん……？ 入ってもいいです、か？」

当然、返事はありません。

「入りますよ……？」

ゆっくりと豪奢なドアを開けると、部屋の窓際近くに置かれたこれまた大きなベッドに、レイさんが寝ていました。

姿は確認できませんが、布団の膨らみで分かります。

「レイさん、朝ご飯が出来てますよ、起きてください」
「うー……い」

近寄りながら話し掛ける私に、レイさんは寝ぼけ声で返事をします。

ベッドの前に立ち、耳元（布団に包まってるので、耳元らしき部分）近くで声をかけますが、やはり起きません。

この人、いつもどうやって起きてるんでしょう……

布団を剥けば起きるでしょう、そう思い掛け布団を体から引きはがします。

「な、なんで裸……？！」

正確には上半身のみ裸です。

寝ていたら可愛らしい顔とは裏腹に、筋肉の凝縮された無駄の無い体です、流石騎士さんでした。

「い、意外にたくましい………じゃなくてですね！」

レイさんっ、朝です、ご飯です、起きてくださいっ！ 今起きないと、美味しいご飯食べられませんよ！」

パチっと、今まで固く閉じられていたレイさんの瞼が開かれました。

「起きましたか？ じゃあ早くご飯………に？」

よく見ると、まだ目が虚うつろです。

上半身を起こし、床に足を付けて、洗面所へとのろのろ歩いて行き、冷えた水を顔に浴びせ、備え付けの布で顔を拭きました。

「……おはよ」

「あはは、おはようございます。朝、弱いんですね」

「ああ、うん………血圧低いんだ。それでエリー、朝からどうしたんだ？」

「あ、はい。朝ご飯を作りましたので、温かいうちに食べて頂くかと思ひまして！」

下で準備して待ってますので、着替えたら来てくださいね？」

「ん、わかった………」

「次からは服着ててくださいね………？ 朝から刺激が強いです」

箆笥に向かうレイさんに、部屋を出る前に小さな希望を申し上げます。

「んん、次があるのか？」

「あ、ありませんっ！　じゃあ早く来てくださいねっ！！」

「待て、エリー」

今度こそ部屋を出ようとした私に、レイさんが声を掛けてきます。

「今日、俺は仕事がある。飯を食った後に騎士団の方に行くから、エリーも付いて来てくれ。」

改めて任せる仕事の説明なんかをするから、まあ軽く準備だけしといてくれ」

「騎士団ですか、分かりました。服装は特別な物を用意しなくてもいいですか？」

「その服で大丈夫だ。基本的に男所帯だから、すまんがその点は分かってくれ……」

それから二言三言の会話を投げ合った後、私は食事の準備へ戻りました。

「お、おおお……これが、朝食か？」

食卓に並べた食事を見て、レイさんが感嘆の声を漏らしました。

「はい。何か変でしたか？」

「初めてだ、家で飯を食うなんて。いつも仕事場行く道すがらに、適当な物を買って食ってたから」

「そうなんですか、こんな物でよければ毎日お作りしますよ？」

「本当か！ 是非頼む！」

そういえば、どうしてレイさんは使用人の方に食事を頼んだりしないのでしょうか。

これだけのお屋敷に住んでいるのに、食事は庶民がそれ以下のものを食べていて。

それにレイさんのご両親は、何故この家に居ないのでしょうか……。

「親は死んだ」

食事を続けているレイさんが、顔を上げずに言いました。

「え？」

「親は死んだ、過去の他国との戦争でな。」

父は騎士、母は魔術師として共に戦場に駆り出されていた。死に際は、なんとも呆気ないものだったがな」

「……そうなんですか」

「そんな顔をするな、別にエリーの事でも無いだろう？」

「私も、両親は居ないので……少し、お気持ちも分かりますから……

…」

「悪魔にも親は居るものじゃないのか？」

「淫魔には親は居ません。子を作ることは出来ませんが、それによって生まれる子供は淫魔ではありません。」

淫魔は自然に生まれ、そして生まれたときには自我を持ち、世界に存在します。

だから親も兄弟も、家族と呼べるものではありません……」

私が生まれたのは、静かな魔力が漂う森の中でした。

初めて見たのは鬱蒼とした木々に紛れた川の清流、初めて聞いたのは川のせせらぎ。

「……淫魔にも仲間はあるだろ？」

「私は他の淫魔の方々には、あまり好かれないので……『淑女然とします！』なんて公言して、淫魔という自分を否定する生き方をしていたので、当然と言えば当然です」

「孤独は死に至る病だ。エリーは寂しくは無かったのか？」

「寂しかったです。悪魔は、人間のように馴れ合う事はしません。」

同じ種族、眷族同士ならば仲も良いのですが、私の場合は話せる人なんて1人くらいしか居ませんでしたから。

だけど、後悔なんてしていません、『淫魔』としての自分自身に誇りを持っていますから」

「そう、か……」

レイさんは何か考える素振りをして、対面に座った私の眼を見て、次にこう言いました。

「じゃあ。1人が2人に増えたな」

「それはどういう——」

「——時間がやばいぞ！ 今日エリーへの説明もあるし、そ

ろそろ出ないと駄目だ、速く食べるー」

再び食事に戻ったレイさん。

2人と言うのは、どういう意味なんでしょうか……。
包み隠し過ぎていて、分かりません。

「うん……？」

ともかく、レイさんの言う通り食事を急ぐことにしましょう。

魔法騎士団。

グラベルの中心には、広大な面積を持つ王城があります。

魔法騎士団の兵舎や訓練所、また事務所などは王城裏の庭にありました。

庭とは言っても、大きさはそんなじゃそこらの庭程度ではなく、もう一つ城を建てられそうな広さを持ちます。

「エリーには、基本的に事務仕事をしてもらう。主に書類の整理だ」
「それは良いのですが……先程から、どうして私たちをチラチラと見る人が居るんですか？」

「ああ、ここは女子禁制だからな、エリーが珍しいんだろう」
「じ、じゃあ私ここに居ちゃだめじゃないんですか?!」

さつきから物珍しそうな視線を受けていたのはそのせいですか！

「言っただろ、エリーは俺の右腕として働いてもらってさ。騎士
団長として、ちょっとくらいの融通ゆうちゆうは通せる」

「それいいんですか団長さん」

『構わん』と、当然とばかりに頷くレイさん。

「団長。おはようございます！」
「おはようございます、団長！」

そうこう言っている間に訓練場に辿り着き、整列した青年たちが
隊列を組んで一斉にレイさんに挨拶をしました。

隣に立ったレイさんの顔を窺い見ると、いつも見る表情ではなく
団長としての顔つきに変わっていました。

対して騎士たちは、団長の隣に立つ私への戸惑いを隠せていませ
ん。

私もこの場の空気に耐えられません。

「おはようお前ら！ 生憎あいにく、今日もグラベルは平和で俺たちの出番
はない！」

『団長、いつも平和です!』『平和で良いと思います!』と、何
人かの騎士たちが声を上げました。

「ああ、平和なのは良い事だ。しかし、せっかく新設された騎士団だと言うのに、戦中でも無いし内乱が起こってる訳でも無いのはどういうことだろうと、俺は常々疑問に思っていた。

グラベルは他国に比べて国土、人口、兵力、戦力などで、あらゆる分野において突出している。であるのに、なぜ『魔法騎士団』を設立したのか……ジョナサン、分かるか?！」

騎士たちの先頭の列に立った金髪青年に、レイさんが指差して指名しました。

「我々にしか出来ない事をするためでしょうか!」

「そうだ、その通りだジョナサンッ!

ではギブソン、俺たちにしか出来ない事とは何か分かるか?！」

ジョナサンに次いで、隣に立っている茶髪の青年に問い掛けます。

「分かりません、分かりませんよ団長!」

「うむつ、俺も分からん!」

『団長、分からないんですか?!』『流石です団長!』、何でしよう……この無駄に訓練されたMCとオーディエンスのような騎士団は。

「しかしだ、俺たちが必要とされる時は必ず来る。ならば今すべき事は何かわかるか?」

「…………訓練ですつ!!!!」「…………」

「そうだつ!」

「そうなんですか?!」

思わず突っ込みを入れてしまいました。
つい洗脳されて、言葉を挟むことすら忘れていました。

「団長お！ そちらの女性はどなたでしょうか！」

「ジョナサン、気になるか？」

「気になります！」

「じ、自分も気になります！」

ギブソンさん、そこ便乗するんですか？

あなた、厳つい顔して中々茶目っ気のある方ですね、思ったより声も高いですし。

「うむ、ならば自己紹介をしてもらう、エリー？」

「ふえ、私がするんですかっ？」

「自己紹介なんだから、自分がしないでどうするんだ？」

「そ、そんな……無理です、無理ですよ！ こんなに、しかも男性の方に注目されて喋れるわけじゃないじゃないですかあ……！」

無理です、絶対に無理です。

考えただけでも足が竦すくんじゃうのに、自己紹介なんて出来るはずがないじゃないですか……！

魔法騎士団（後書き）

次回に………続くう！

ご指摘などあれば、お気軽お気軽に言ってください。
ご感想やお気に入り登録してもらえると、励みになります！
アルファポリスのランキングにも参加しているので、面白かったら
ポチッとワンクリックしてくれると嬉しいです！

魔法騎士団その二（前書き）

圧倒的……短さ！

魔法騎士団その二

「む、無理ですよ……！」

「ただの自己紹介だぞ？」

ただの自己紹介でも、私にとっては大事おおごとなんです。
それも大勢の男性が注目している前ですとなると、とてもじゃないですが出来ません。

「じゃあ、頼む」

「そんな、レイさん……！」

レイさんは私を促して、自分は一步後ろに下がってしまいました。
自然と私が騎士さんたちの視線を一身に受ける形になってしまいます。

「ええ……つと……」

ジオナサンさんとギブソンさんが、興味津々そうに私を見ています、それでも姿勢を全く崩さないのは、騎士としての心持ちのようなモノでしょうか。

背後のレイさんを見ても『どうした？』と見返すだけで、私が男性恐怖症と言ったのを既に忘れていたような感じです。

そもそも今まで人とあまり関わりを持たなかった私には、自己紹介なんて高度なコミュニケーション技術は持ち合わせていません。
ですが、このままでは埒らちがあきません……覚悟を決めて自己紹介ですっ！

「き、今日からレイさんのお手伝い……として、じ、事務仕事などをお手伝いさせていただくことになりました……エリザベス、です……」

途中で何度か嘔みながらも何とか言い切った私は、視線から逃げるように、レイさんの背後にトコトコと隠れました。

「と、言う事だ。まあ事務仕事だから、基本的に関わる事は無いと思うが、一応新しい仲間として迎え入れてやってくれ」

そう言つと、レイさんは私を前を押し出して頭に手を置きました。

「尚、^{なお}エリーに不用意に近付いた奴や、触れた者には恐ろしい結末が待っている」

「団長、どうしてですか！」

「良い質問だ、ブランド！試してみれば分かると思うが、お前らの為に教えておこう。」

エリーは男が大っ嫌いでな、近づいたら一瞬で黒焦げにされ――

「――勝手に事実を捻じ曲げないでください！」

つい無意識的に、レイさんの頭を叩いてしまいました、しかしレイさんは特に気にした風もなく、ただ私の頭に置いた手をわしゃわしゃと動かしました。

同時に、騎士さんたちがざわざわと騒ぎ出します。

『団長の頭を叩くなんて……』『俺らには出来ないな！』『あの御嬢さん何者だ』

「まあ、冗談だ。実際はエリーは男性が嫌いなのではなく、極端に苦手なだけだ。」

近付いて黒焦げとかは無いと思うが、半分ぐらい焦げるかもしれないからな、気を付けろ」

「団長は大丈夫なんですか!」

「ん、ああ俺は……大丈夫なのか?」

逡巡した後に、何故か私に問い掛けるレイさん。

「命の恩人を燃やしたりしません……」

「そういうことだっ! まあ、女日照りでエリーみたいな可愛い娘に飢えてるだろうが、こいつを困らせるようなことはしないように! それじゃあ、今日も『実を結ばない』訓練を始める! 実力を発揮する機会が無くても、腐らずに頑張るぞ!」

最後にレイさんが締め言葉を放つと、騎士さんたちが口々に『了解!』と叫び、各々が急ぎ足で訓練の準備に取り掛かりました。

「よし、エリー」

「あ、はい!」

「仕事の説明をする。事務所に案内するから付いて来てくれ」

訓練所から少し離れた場所にある事務所まで案内され数分。
流石国の中心、事務所一つにしても素晴らしい大きさです。
事務所内の長い廊下を歩きながら、レイさんがぼつぽつと説明を
始めました。

「俺たち騎士団は戦争の時以外は基本的に用無しだ。精々国の領地で暴れて村を襲う盗賊や野党共、そして魔物の退治があるくらいだ。だから書類整理と言っても、多くを求めはしない。
もっか目下、エリーに頼みたいのが……」

レイさんが私によく見えるようにして、一つの扉を開きます。

「……汚いですね」

「ああ、汚いだろ」

「ということ？」

「ああ。予想はついたと思うが、事務室の掃除を頼みたい」

事務室の中は、異世界と呼べるような有様でした。
足の踏み場も無いとは、まさにこの事です。

「どうしてこんなになるまで放置してたんですか！」

「何とかしようと思ったが、すればするほど汚くなるんだ！」

「うう、分かりました。取りあえずは掃除から始めます……終わったらどうすれば良いですか？」

「そうだな……とりあえず訓練所に来て、声を掛けてくれ」

「はい、訓練頑張ってください、ね」

部下たちを待たすまいと、すぐに出て行ったレイさんの背中にさ
さやかな声援を送ります。

乱雑とした部屋の中を見て、ため息を吐きます。

「生ゴミが無いのが、せめてもの救いですね……さて、では頑張ってみましょうか」

書類系は種類毎に紐で結び、不要に見える物は纏めた後に部屋の外に出して、後からレイさんの指示を仰ぐことにしました。

書類にしても、どれが必要なのかは分からないので全て残して、同じくレイさんに聞くことにしましょう。

そんな作業を3、4時間繰り返して、ようやく部屋の中が片付きました。

とは言え、部屋を埋め尽くしていた書類の量は多く、部屋の片隅には積み重なった書類が鎮座しています。

「ふう……こんなものでしょうか？」

ようやく一段落付いたところで、時計に目をやりました。

「もうすぐお昼ご飯の時間ですね！」

事務所には台所はあるのでしょうか。思い至った私は、台所を探して事務所を歩き始めました。

途中に部屋を覗き込む限りだと、事務室以外は然程汚くないようです、あまりこの建物内は使わないのでしょうか。

彷徨うこと十分、ようやく台所……と言うより厨房を発見しました。

騎士団全員分の食事を作ることを想定しているのか、どの調理器具も一般的な物よりも数倍大きい物が用意されていました。

「食材は……」

備え付けのこれまた大きい冷蔵庫の中を覗くと、野菜類がたくさん詰まっていました。

腐るのを防ぐために完全に凍ってたので、鮮度は問題なさそうです。

「サラダだけだと、物足りないですよね…… 厳しい訓練の後に野菜なんて味気ないでしょうし…… 他に何か無いでしょうか」

棚の中身など、厨房を漁った結果、大量のパンを見つけました。

これと野菜、後は冷蔵庫に入っていたハムなんかを使ってサンドウィッチにすれば、まだマシですね。

ちゃんとした物を作るなら、街に買い出しに行くことも考えないといけませんね。

「よし…… それじゃ調理開始ですね!」

レイさんに言われた通り訓練所に来て見れば、姿をすぐに見つけることが出来ました。

丁度訓練が一段落したのか、騎士さんたちを整列させています。

「—— それでは、一度休みを…… ん、エリー」

訓練所の入り口に立った私に、レイさんが気付きました。

「そ、それは何だ……？」

驚愕を露わにして私の方を見るレイさん、騎士さんたちは気にな
っているようですが、団長の集合の手前で後ろを振り向くことはし
ません。

「片付けが終わったので、お昼ご飯を……これで足りるかはわかり
ませんが」

今、私の周囲にはサンドウィッチが入った、大量のバスケットが
浮いています。

一々手で運んでいたら、時間が幾らあっても足りませんからね。

「あー、お前ら、取りあえず午前は終了だ、礼ッ！」

レイさんの掛け声に一齐に『ありがとうございました！』と威勢
の良い返事を返し、そしてすぐさま全員が私の方を向きます。

「エリーが飯を作ってくれたらしい、食いたい奴は残れ、解散！」

騎士さんたちが喜悦の表情を浮かべます、正直怖いです。

取りあえず、事務所で見つけたシートを魔法で敷いて、その上に
バスケットを置いていきます。

「わざわざすまん、これだけの量だと大変だっただろ」

「いえいえ、単純な作業の反復でしたから。食材を切ったりは魔法
に任せたので、殆ど魔法頼みです」

「魔法でそんなことが出来るのか？」

「あらかじ予め行動を指定しておけば可能です」

「そんな使い方もあるのか……今後の参考にしよう」

うん、と一人納得すると、どうしようかと棒立ち状態の騎士さん達を置いて、先に昼食を始めてしまいました。

「あ、良ければ皆さんも……どう、ぞ？」

私が一声かけるのを待っていたのでしょうか。

皆が一斉にシートに駆け出して食事を始めてしまいました。食事がすごい勢いで減っていく様を見て、私は思いました。

「次はもう少し大目にしましょう」

魔法騎士団その二（後書き）

なんだか地味にスランプです。

この文章を書いている時なのですが、全く指が動きませんでした。もう、次が思い浮かばない……みたいな感じです。

一応ファンタジーなので、戦闘描写も入れるつもりではあったんですが、何分プロットも作らずに書いた作品なので迷走しています。何かご意見をくださいw

ご指摘などあれば、お気楽お気軽に言ってください。

ご感想やお気に入り登録してもらえると、励みになります！

アルファポリスのランキングにも参加しているので、面白かったらポチッとワンクリックしてくれると嬉しいです！

遠征前（前書き）

更新に少し間が空いちゃいましたね。

遠征前

どうも、淫魔のエリザベスです。

人間界に来て、早くも一週間と少し経ちました。

魔法騎士団での事務仕事もそつ無くこなせるようになり、レイさん以外の騎士さん方にも大分慣れてきました。

ただ、慣れるのと話せるようになるのは別なのですが……。

はい。慣れると言うのは、『騎士団』の枠組みの中で一緒に居るのに慣れただけで、やはり近寄られたり、喋りかけられたりすると不安が勝ってしまいます。

所々でレイさんがサポートを入れてくれたり、助けてくれたりもしましたが、結果は芳しくありません。

一方、レイさん率いる魔法騎士団ですが、これが中々に優秀な若者が多いみたいです。

団長であるレイさんよりも年上の方も居ますが、精々二十代の後半に差し掛かるかくらいの若年の方ぐらいです。

訓練中に重きを置いているのが連携、団でのチームワークです。

それぞれが任された役割を全力でこなし、誰かがミスして欠点が生まれれば、他の人が穴を埋める。

中心に立つレイさんも、常に周囲に気を配って指示をしつつ、自身の役割をこなしています。

隊の信頼関係が垣間見えますね。

もちろん『魔法騎士団』の名の通り、全員が魔法を使えるようですよ。

個人の魔法技術もそこそこで、複数人での合体魔法が圧巻です。新生の団とは言っていますが、他の団にも引けを取らない力を持っているのでは無いでしょうか。

お昼過ぎの事務室は静かです。

部屋には私しか居ませんし、聞こえるのは遠くから聞こえる騎士さんの訓練に励む声だけです。

最近、事務仕事も午前中に終わることが殆どになりました。

この仕事、日によってはやることが全くない時もあるので驚きです。

あるのは、せいぜい魔法騎士団の管轄する地域の警備関係の報告書類ばかりです。

そして午前を過ぎた今、私が事務室で何をやっているかと言うともう一つのお仕事です。

「こんなものでしょうか……視察と言っても、書くことなんて多くありませんね……」

そう、視察のお仕事です。

今はグラベルの治安、商業について報告書を纏めていたところです。

「今日はこの辺で終わりにして、レイさんたちの様子でも見に行きましょう……んっー！」

長い間椅子に座っていたので、伸びをして固まった体をほぐします。

机に広げた書類をファイルに纏めて、部屋を出ようと思った矢先

に、部屋の扉を叩く音が耳に入りました。

「はい、どなたでしょうか？」

「大臣からの伝令を預かって参りました者です。入ってもよろしいですか？」

「あ、少々お待ちください！」

大臣から……疑問に思いつつも、扉の前に立つ方を待たせてはイケないので、急いで扉を開けます。

立っていたのは、お爺さんでした。

年齢にしては少し背が高いくらいで、特徴と言える特徴も特にありません。

「貴方がエリザベス様ですね、レイライト騎士団長からお聞きしております。

レイライト様の秘書も担っているとの事なので、大臣からの依頼もこちらにお持ちすれば良いと思ひまして……」

そう言うと、お爺さんは手に持った紙を私に渡し、お手本のような礼を一つすると、長い廊下を帰って行きました。

「ええつと……遠征？」

紙には魔法騎士団への遠征の依頼と書かれていました。

グラベルの北部の最たる場所に位置する村で、魔物の田畑荒らし、果てには人的被害までも出るようになったので、村が国に頼ったらしいです。

グラベルは当然放置するはずもなく、その解決策として魔法騎士団の派遣を決定したということでしょうか。

「詳細はレイさんに見せてから聞きましょう。これは元々レイさん宛てのものですもんね……」

そして私は紙を手にもって、レイさんの居る訓練所へと足を向けるのでした。

訓練所の入口に着くと、丁度訓練の休憩中だったのか、レイさん含む騎士団の皆さんが地面に座って軽い談笑を展開しているのが見えました。

そして、私が来ると決まって一番に気付くレイさんが、今日もその例に漏れずに私にいち早く気付きました。

座りながら私の方に手を振っています。

レイさんは団の騎士さんたちに囲まれていたので、失礼とは思いましたが、浮遊魔法で騎士さんたちの上を飛び越えてレイさんの前へと着地しました。

ドレスなので、俗に言う絶対領域（スカートの中）は曝ひらさぬよう意識して飛んだのは、言うまでもありません。

「今日は遅かったな、エリー」

「少し用事がありましたので……今は休憩中ですか？」

「ああ、それに今日の訓練はここまでだ。更に今日の午後から明日は休日だ。」

「ところで、それは何だ？」

レイさんが私の持った紙を指差します。

「はい、先程大臣からの使いの方がいらっしやいまして……取りあえずこれを読んでみてください」

差し出した紙を受け取り、読みはじめるレイさん。

初めは仏頂面でしたが、読むに連れて表情が綻んでいき、終い^{しま}には満面の笑みを浮かべました。

「お前ら、明日はよく休んでおけよ？」

紙から目を離し、『何だ何だ？』とレイさんを見ていた騎士さんたちに語りかけます。

「四日後に久々の遠征だっ！ 日頃の訓練の成果を見せる良い機会だぞ！」

『おおおおおおっ！』

「明日は予定通り休み、明後日は配置の訓練に変更、遠征の前日は午前に配置、午後は準備とする！」

各自用意は怠^{おこた}らないように、では解散だっ！」

『ありがとうございます！』

レイさんの言葉に騎士さんたちも大声で応え、今日の訓練は終了となりました。

心なしか、騎士さんたちの表情がいつもより嬉しそうに見えます、

やはり自身の力を発揮する場面が生まれたことは、彼らにとって喜ばしいことですね。

「あ、あの……エリザベス様っ！」

レイさんが騎士さんたちと戯^{たわむ}れているのを眺めながら、そんなことを考えていると、不意に誰かに名前を呼ばれました。

振り返ると、見覚えのある顔でした。

訓練を見学している時にでも見たんだと思いますが、名前までは分かりません。

「はい、何でしょう？ えっと……」

「ウ、ウェイバーと言います！ 少々お時間よ、よろしいでしょうか？」

綺麗に直立し、所々噛みながら話すウェイバーさん……ウェイバー君かな？

レイさんもまだ来なさそうですし、用事もないので断る理由なんてもちろんありません。

「はい、大丈夫です、何かありましたか？」

「エリザベス様は、明日何かご予定などはあるのでしょうか！」

「いえ、午後は特に考えていません。後、『様』なんてつけなくても……」

「そ、そーですか！ ではエリザベスさん、ごご午後に私と食事でもどうでしょうか？！」

「食事ですか……えっ？」

こ、これはどういう意味でしょう。
わざわざ男性が女性に食事のお誘いをするということは……そういうことなんでしょうか。

「お気持ちは嬉しいんですが、やっぱり男性と二人でどこかへ行くのは少し……」

「う、そうですね……」

目に見えて落ち込んで、肩を降ろしてしまったウェイバー君を見て、なんだか申し訳なくなってきました。

「で、でもウェイバー君の事が嫌いとかじゃないんですよっ！ただ……ただ男性とつていうのが……」

ですから、いつか私からお誘いします、ね？」

「は、はい、ありがとうございますっ！

あ、後——」

意気消沈した状態から、心なしか元気になったウェイバー君が疑問を口にします。

「団長とは一体どういう御関係なのでしょう？ 団長も男性ですが、エリザベスさんに近付いたり触ったりしても、エリザベスさんが気にしていない様子でしたので……」

やはり……？」

「ううん。ウェイバー君が考えてる様な関係じゃないですよ。

レイさんは……レイさんは私にとって命の恩人なんです。自分でも不思議ですが、レイさんには触られてもあまり嫌な気はしないんです」

「……理解しましたっ！ 自分も負けぬように頑張ります、それでは失礼します……！」

「あ、はい……。つて、何を頑張るんでしょうか？」

既にウェイバー君が去った後で、私は一人呟くのでした。

突然ですが、私はあまりお酒に強くありません。

魔界のお酒は人間界に比べて、度の高いお酒が多いので、人間界のお酒だと飲んでも多少はマシですが、それでも強くないことに変わりはありません。

ジョッキで1杯飲んだだけでも、頭が少しボーっとしてしまいます。

2杯3杯ならまだギリギリ大丈夫ですが、5杯にもなると翌日は記憶が無くなるほどです。

そして今、私は騎士団の皆さんと一緒に酒場に居ます。もちろんレイさんも一緒です。

「お、おいエリー。あまり飲みすぎるな、顔が赤いぞ？」

隣に座ったレイさんが、心配そうな顔で私を気遣ってくれます。

「大丈夫でー……す？　まだ4杯飲んだだけです、よ。心配しないでくらすいっ！ひうつく！」
「呂律も回ってないって、無理しないで休め、それとももう帰るか？」

どうやらレイさんは、私が酔っていると思っっているようです。酔っ払いは『酔ってるだろ？』と聞かれれば、皆が酔ってないと言うようですが、私は酔っていません。

魔界に比べると、お酒の度も強くありませんし大丈夫です。それに、ここで私が帰ってしまうと、周りで楽しんでいる騎士さんたちに申し訳ありません。

「帰りませんっ！　帰りませんー！　それともレイさんは……」
「な、なんだよ」

レイさんの方に四つん這いで近寄り、レイさんの膝の上に座って向かい合う形になります。

そのまま鼻が付くくらいまで顔を近づけて、問い掛けます。

「……私に帰ってほしいんれすか？」
「顔が近い、エリー、顔が近いぞ」
「……おおっ！　れも、嫌れすか？」
「いや、嫌とかじゃなくて……お前普段こんなことしないだろ！」
「お前じゃいれすー！」
「エリーっ！　淑女らしく、じゃないのか？」

淑女らしく？

私は常に淑女です、どうしてレイさんはそんなこと言っんでしょ。

「なるほろ、この体勢はイケにやいれすね！」

「そうだ、まずはそこからだ！」

「よいしょっと……」

向かい合った体勢から、レイさんの胸を背中に当ててもたれ掛かる体勢にします。

これなら問題ありません。

「……やっぱり酔ってるな？」

「酔ってませんー！」

「分かった、エリーは酔ってない。だからもう寝ろ」

「うわーあ」

『寝ろ』と言って、レイさんは後ろから私の目を手の平で覆ってしまいました、前が見えません。

手でどけようとしても、しかし思ったよりも力が強くて外せません。

「レイさ、ん……？ どけてくださ……いー……」

可笑しいですね、急に頭がボーっとしてきて眠くなってきました。

「こいつ、軽いな……」

夜中も過ぎ、しかし大通りは未だに活気溢れ、人が溢れ返っている。

その通りを、レイはぐっすり眠りエリーを背中に抱えながら歩いていた。

結局、酒場での打ち上げの途中で眠った（眠らせた）エリーを放置するわけにもいかず、レイは部下たちに断りを入れて帰路についたのだ。

「酒癖悪いし、今後は吞ませすぎないようにした方がいいだろうな……」。

しかし酔うと淫魔っぽい言動が多くなるな……それでも一線を越えないのは、エリーの自制心ってやつか」

不意に、エリーが身動きする。

レイの独り言で、自分の名前を呼ばれたと思ったのだろう。

「起きてたら怒るかもしれないが、さっきのエリーはやけにエロかったな……。頬も赤くなってたし、目も潤んで……。体勢的にも色々と危なかったし、それは今もか」

エリーの綺麗な肢体を背中で感じながら、再度呟いた。

「エリーと居ると人間と悪魔、種族の違いだけで対立している事が

不思議に思えてくるな。

仮にも国の騎士団長を勤める人間の台詞じゃないな……」

自嘲気味に小さく微笑するレイ。

「まあ、それでもエリーと居る間は退屈しなさそうだ。もう少しはこのままでもいいか……な？」

眠るエリーに返答は無いと知りながら、語りかけるのだった。

遠征前（後書き）

むー、なかなか難しい。

だんだん続きを考えるのが難しくなってきたよ！

多分ですが、1か月程で淫魔は完結して、新たな作品を書くと思います。

新たな作品ってのが、淫魔の続編的な扱いになるとは思いますが。

ご指摘などあれば、お気軽お気軽に言ってください。

ご感想やお気に入り登録してもらえると、励みになります！

アルファポリスのランキングにも参加しているので、面白かったらポチッとワンクリックしてくれると嬉しいです！

疑問（前書き）

エリーとレイが、勝手に動きまくって俺のいう事を聞いてくれませ
ん。

プロットなしとはここまで難しいものなのですか！

疑問

どうも、淫魔のエリザベスです。

ベッドの上からおはようございます。

頭が痛いです、二日酔いです。

理由は考えなくても分かります、九分九厘くぶくりん昨晚の酒場での飲酒が原因ですね。

人間界のお酒が思ったよりも度が低かったのと、途中でレイさんが止めてくれたおかげで、まだマシです。

そして今現在、私エリーは深い自己嫌悪と後悔に苛さいまれています。理由は考えなくても分かります、九分九厘昨晚の自分の行動です。こちらにもレイさんが止めてくれたおかげで、色々と手遅れにならずに済みました。

「私は淑女失格です……お酒に負けて、あんな不埒ふいぢな言動をしてしまうなんて……！」

う、頭が痛い……」

傍はたから見れば、一人で頭を振り回した後に頭を抑えてうずくまる私は変人ですね。

「駄目だ、プラスに考えないと！ 昨晚のことを私は覚えていないとレイさんは思っているはずですよ！」

これから挽回出来るはずですよ、ポジティブに考えるんです！」

一人決意する私。

「さて、いつまでも寝ていてはイケませんね、朝食を作らないと」

冷たいお水でも飲めば気分も良くなるでしょうし、レイさんの朝ご飯も作らないといけません、気分を変えて頑張りましょう。

決めれば行動は素早く。

ベッドから出て、速すみやかに着替えを終えます。

今日はレイさんに買ってもらった服ではなく、家の中用に先日買った裾が膝上くらいのズボンと群青色のセーターです。

以前の借家の住民登録を解除しに行った際に、偶然見かけた服屋で買いました。

「あ、レイさん……今朝は早いんですね？」

顔を洗い、歯を磨き、身支度みしたくを整え厨房へ行くと、珍しくレイさんの姿がありました。

「エリーか。頭は痛くないか？」

「あ、ありがとうございます。まだ少し痛いですが……昨晩は羽目を外しすぎたようですね……何かご迷惑はかけませんでしたか？」

ミルクを入れたコップを差し出してくれたレイさんに礼を言っ、あたかも昨晩の事など覚えていないフリをして問い掛けます。

「あー、まあ……迷惑はかかってない、かな？」

「ソウデスカ、ヨカッタデス」

実際は酒場での事も、帰路での事も覚えています。

しかも帰路で途中で目が覚めてせいで、レイさんに背負われた事も、レイさんの独り言も聞いていました。

嘘を付くことに良心が痛みますが、少しくらいの嘘は神様も許してくれますよね、悪魔が神様にご機嫌を伺うつてのはどうなんですよ。

まあでも、レイさんに信頼されているのが分かったので、少し嬉しいです。

ともかく、嘘を付いてるのを気付かれては元も子ありません、いつも通りのエリーになるんです！

「とーころで、レイさんはどうしたんですか？　それも厨房なんかで……」

「いや、二日酔いでエリーはしばらく起きてこないと思ってな。

代わりに朝飯を作っておこうと思ったんですが……まあ、この様だ」

そう言っつて、レイさんは自らの背後に隠した惨状を私に見せました。

「何ですか、これ？」

「うむ、目玉焼きだっ！」

目玉焼きと言うのは、まさかこの炭化した『何か』のことでしょうか。

それとも隣にある縮れた紐ちぢのような物体のことでしょうか。

「な、何をしたらこうなったんですか？」

「卵を溶といて、それをフライパンに敷いて、蓋をした後置いといたんだ」

「……まず目玉焼きは溶きません、溶いたら卵焼きです。

あと一応お聞きしたいんですが、どれくらい放置しましたか？」

「んー、15分……くらい？」

「そりゃ焦げちゃいますよ！　目玉焼きをする時は、その都度焼け具合を確認しながらでないといけませんよ！」

取りあえず、目玉焼きの残骸を処理することにします。

流石にこれは食える以前の問題です、炭になってますし。

「じゃあ、私が作りますね。レイさんも作り方なんかを見てみてください」

「わかった、じゃあ頼む」

油の敷いたフライパンに卵を放り込み、返して裏面の焼き具合を確認しながら焼き続けます。

「こんな風に、裏側が焦げないように見ながらやるんです」
「ほうほう……」

丁度良い具合になったので、返しを少し斜めに構えて卵とフライパンの間に滑り込ませます。
返しにのった目玉焼きを、皿の上に乗せ完成です。

「間に返しを差し込む時に、力を入れすぎると形が崩れちゃうので注意です。」

「はい、どうぞ食べてください。トーストとサラダはいりますか？」
「ああ、頼む」

渡した皿を持って、厨房備え付けのテーブルで食事を始めるレイさん。

「今日、レイさんは何か予定はあるんですか？」

トーストを焼き、片手間で野菜を刻みながら問い掛けます。

「いや、特にはない。たまの休みだから体を休めて遠征に備えようと思っている。」

エリーは午前は何処かに行くと言っていたな……」

「あ、はい。遠征中に騎士団の人たちの前で悪魔の姿を曝さらすわけにもいきませんし。」

詠唱補助の付いた、人間用の杖でも見に行こうと思っています」

「エリー？」

『はい？』と振り向くと、レイさんが食事を止めて真剣な表情で私を見ていました。

「遠征について来るつもりか？」

「え、はい……そのつもりで——」

「——駄目だ。今回の遠征は魔物だけじゃなく、人間も相手になる可能性があるんだ」

「レイさん、私は悪魔です。たとえ人型でも、そこらの魔物や人間に遅れは取りません」

「だとしても、戦場に女を連れて行くのは反対だ！」

珍しく……いえ、初めてレイさんが乱暴とも言える口調で私に言いました。

「……エリー、人を殺したことはあるか？」

転じて、静かな口調で私にさらに問い掛けます。

レイさんの眼は私を真っ直ぐに捉え、そしてその目はどこか悲哀を感じさせました。

「俺はある。」

初めて人を切り殺した時は、暫らく眠れなかった。眠れても、悪夢を見るんだ。殺した人間の顔が暗闇に浮かんで、逃げてても逃げても追いかけてくる。

俺は殺人快楽主義者ではない、人を殺すことに喜びを感じたことは一度たりとも無い。

そんな俺が戦場に立つのは、貴族の誇りや国への忠誠の為なんかじゃない。自分自身の誇りと、仲間への忠誠だけだ。

理由も目的も無ければ、俺は騎士団長になることも戦場に立つことも無かっただろう。

エリー、お前に戦場に立つ理由はあるのか？」

「……………ない、です」

「なら、戦場に立つなんて言っな」

「はい……………ごめん、なさい……………」

軽率、軽率過ぎる自分に嫌気がさす。

私は何を思っただけかと思っただけでしょう。

「いや……………そもそも『俺の右腕として働け』と言っただけ俺だ。

エリーはいやに真面目だから、義務感で自分も手伝わないといけないと思っただけだ。

俺の落ち度だ、悪かった……………」

「謝らないでください！ レイさんの言う通りで、私には戦う理由もありませんでした。

それに、私は今まで魔物を殺した事ありません、軽率でした……………本当にすいません」

魔界の住人である限り、仲間である魔物を殺すことは裏切りです。魔界に人間が居るはずもなく、当然人間を殺める切っ掛けすらありません。

「エリー」

「はい……………」

「飯、美味しいぞ」

「……………ありがとうございます」

慰めのようなレイさんの言葉で、少し気が楽になりました。

でも、私は義務感から付いて行こうと思ったわけではありませんでした。

じゃあ、一体なぜ一緒に行きますなんて言葉が……口から出たのでしょうか。

疑問（後書き）

ご指摘などあれば、お気楽お気軽に言ってください。

ご感想やお気に入り登録してもらえると、励みになります！

アルファポリスのランキングにも参加しているので、面白かったらポチッとワンクリックしてくれると嬉しいです！

幕間 ツェペルさんの電話（前書き）

外伝じゃないけど外伝みたいな！

幕間 ツェペルさんの電話

どうも、淫魔のエリザベスです。

朝方にレイさんと気まずい雰囲気になってしまい、お昼なのに部屋に引き籠っています。

いえ、悪いのは一方的に私ですので、私がそういう雰囲気にするだけというのが正しいです……。

どうしようかとベッドの上で思考を巡らしていると、ある事に思い至りました。

「ツェペルさんに相談しましょう！」

そう、私は人間界に降り立つ前に、ツェペルさんと魔電番号（自身の魔力を利用した通信技術）を交換していたのです。

落ち着いたら電話をしようと思っていたのですが、今まで誰かと番号を交換したことの無い私には、自分から電話する勇気が湧かなかったのです。

履歴によると、数回ほどツェペルさんから掛かってきた事もあったのですが、全て仕事中で出ることが出来ませんでした。

というか、仕事中は端末機は家に置いています。

「えっと、これだったかな……」

不慣れな手つきで、端末機と戯れること数分。

何とかツェペルさんにかけることが出来ました。

数回のコール音の後、ぷつっというノイズが通信の開始を告げてくれました。

「あ……エリザベスです！ 届いてますか、声は聞こえるんですか

「？」

「エリー……」

「あ、繋がりました！ ツェペルさんですか？」

声色は私のよく知るツェペルさんの声でした、念のため本人かどうかの確認を取ります。

「『ツェペルさんですか？』じゃない！ こっちから連絡入れたのに、掛け直したりもしない！」

人間界に転送された時に座標位置の設定ミスで大怪我したって報告書にあつたって聞いて、心配したのに！」

「ああ……す——」

「————— suite さんとか言わないでね？ それで、どうして連絡しなかったの？」

「いやあ……いざ電話しようとなると踏ん切りがつかなくて。今まで電話したことなんて無くて緊張してしまっていて……」

「あなたただけコミュニケーション能力無いの？」

「人間界に来てからは頑張っていますよっ！」

「それを聞いて安心したわ。」

それで？ 電話してきたってことは、何か話があるんでしょう？」

ツェペルさんに話すように促され、私はつらつらと語りはじめました。

こちらに来てレイさんに出会い、二回も助けられたこと。

レイさんのご好意で安住の住家をお借りしたこと、その等価交換として食事、また騎士団の事務仕事を任されていること。

そして先日騎士団に遠征の任務が下り、私が付いて行くと聞いた事でレイさんと喧嘩してしまった事。

「まあまあ……男性恐怖症のエリーが、よく男と喧嘩出来るくらいに親密になれわね。それもたったの一週間少しで」

「それは……レイさんは命の恩人ですから！」

「ふむ……それでエリーは何を聞きたいの？」

「いえ……私が軽い気持ちでの発言が原因なのは分かっているんですが、どうして……」

どうして……。

「どうして……？」

「どうして付いて行きたいと思ったんでしょ……？」

「ははは……それはー」

笑いの含んだ口調で、ツェペルさんが言いました。

どこか呆れを感じさせ、さながら言葉の溜息と言った感じでした。

「エリー。あなたはそのレイって人の事どう思ってるの？」

『命の恩人』は無しでね？」

「あ……」

言おうと思った事を先に言われました、これが読心術と呼ばれるものですか。

しかし電話越しで読心とは、流石はツェペルさんです。

「まあ、貴方がレイって人をどう思っているかは置いて、どうして付いていきたいかは決まってるんじゃない？」

「え、でも……それが分からないんです……よ？」

「うっん、エリーは『付いて行きたい』から付いて行こうと思った

んじゃない？」

「それはそうなのですが、それって具体的な理由が伴っていないのではありませんか？」

「いいのさ、まだエリーは付いて行きたいと思ってるんでしょ？」

「それは……そうです」

正直、明確で明瞭で鮮明とした理由なんてありませんが、騎士団と共に遠征に行くレイさんを、いつ帰ってくるかも分からずにお屋敷で悶々とした気持ちで待つのは嫌です。

つまり、付いて行きたいわけです。

しかしながら、先程の厨房での気まずい空気を絶賛継続中の私に『付いて行きたいです！』と、堂々と宣言する勇氣は持ち合わせていません。

「なら、その人に面と向かって『付いて行く！』って言うてやればいいのよ。」

勿論、私もエリーが戦闘なんてして怪我するなんて嫌、だから一番大事なのはあなたが戦わない事。

遠征って言うぐらいなんだから、戦う事しか出来ない人間が集まるわけないでしょ。食事、拠点の作成、その他諸々を担当する人員も必要になるはず。

だから、エリーは戦闘員としてじゃない形で付いて行けばいいの、分かった？」

「な、なるほど！」

そんな事、考え付きもしませんでした。

それによくよく考えれば私は騎士団員ではなく、騎士団の事務的な役割でした。

昼食だって毎日、騎士団の全員分作っているのですしね……。

「流石ツエperlさんです！」

「べ、別に私じゃなくても思いつくわよ……！」

「それでもありがとうございます！」

「あー、もう分かった分かった。」

それより、エリーは絶対戦っちゃだめよ？ 確かにエリーは人型でも悪魔だし、大抵の魔物や人間に後れを取ることは無いでしょうけど、それでもね」

「は、はい……心配してくれるんですか？」

「ち、違っわよ！ 怪我でもして仕事に支障が出たら、推薦状を送った私の立つ瀬が無いでしょ！」

「そう、ですよね……」

それもそうですよね……お仕事の結果が良くなければ、当然私を推してくれたツエperlさんの立場が悪くなるのも当たり前です。

私はそんなことも考えずに衝動だけで行動して、更にその事でツエperlさんに電話までして……。

「ツエperlさん、ごめんなさい……」

「ちよっ、何本気でへこんでるのよ！ 冗談、冗談だから！ 怪我しないでね、エリー怪我しないでね？！」

仕事に支障出ても良いから、辛くなったらすぐ帰ってきていいからね！」

「ツエperlさん……」

「な、な、なに……？」

「ありがとう、ツエperlさん……」

「も、もう良いから……仕事があるから切るわ、ね？」

「はい、絶対にお仕事頑張ります！」

「あー、体にも気を付けて……」。

あと、まあ……何かあったらすぐ連絡しなさい、それじゃ――

――

再び『ぶつつ』と音が鳴り、端末機が私に通信の切断を告げました。

「ああ……ツェペルさんに迷惑ばかり掛けてます……」

いつまでもツェペルさんに甘えてちゃ駄目です。

ツェペルさんは優しい正確をしていますし、なんだかんだで許してくれますが、内心穏やかではないはずですよ……。

これ以上のご迷惑を掛けないためにも、連絡は金輪際しないようにしなくては。

そして今以上に仕事に勢いを付けなくては……！

幕間 ツェペルさんの電話（後書き）

どこまでもすれ違う思考を重ね続ける二人が、そこには居た。みたいな三人称的文章を最後につけようとも思いましたが、一人称で統一しているので、さすがに自重することにしました。

エリーはツェペルの事は好きだけど、迷惑を掛け過ぎて嫌われてそう……だからこれ以上迷惑を掛けないようにしましょう。

ツェペルはエリーの事が好きで、妹みたいに思ってるから迷惑を掛けられてるなんて思っていない。

むしろ、エリーの悩みをため込む性格や、淫魔としては風変わりな言動のせいで苦悩していることを知っているので、もっと自分を頼ってほしいと思っている。

まあ、つまるところお互いにすれ違っているわけです。

本当のところは仲良しになれる二人なんです。

閑話休題。

ご指摘などあれば、お気楽お気軽に言ってください。

ご感想やお気に入り登録してもらえると、励みになります！

アルファポリスのランキングにも参加しているので、面白かったらポチッとワンクリックしてくれると嬉しいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5619y/>

淫乱じゃない淑女な淫魔の日々

2011年12月3日23時14分発行